
オルペリーヌの方舟

mayone-zuu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オルベリーヌの方舟

【Nコード】

N1965Z

【作者名】

mayone-zuu

【あらすじ】

敵も味方もいつもこいつも『最強／最凶』を名乗るに相応しい実力を持つ者達ばかり。

そんな熾烈の中を主人公・ユウヤが駆け走る！

五〇〇年前に世界から幽閉された国『ロストヘブン』。

平凡な日常を送り続けていた主人公、ユウヤに、全く予想にもしない惨劇が待ち受けていようとは、彼も、彼と関わる者達は知る由もなかった。

大切なモノを失ったユウヤは、その原因を突き止めるべくロストヘ

ブンの首都『大都市エデン』へ足を運ぶ。

——それが、人類史上、最大の『過ち』になるうとは思っても知らずに……。

異世界ではないです（笑）

プロローグ

外の世界に興味を持ち出したのは、一体いつからなのだろう……。

海が見たい、と彼女は言う。

緩やかな風に身を任すように、軽く両腕を広げて空を見上げる。

彼女の長い髪がなびいている後姿を見ると、それはまるで、一枚の絵のように見えた。

太陽の光を全身で受け止めているその姿は、翼を広げた鳥がこの無限に広がる大空へと羽ばたこうとしているようだ。

燦々と降り注ぐ光を浴びる彼女の後姿を、俺は数歩後から見つめていた。

「海だつて？」

この質問に、彼女はどう答えるだろう。

「この星の約七割の面積が水で出来ている……それが海。ただのおとぎ話を本気で信じているのかい？」

少し馬鹿にしたような言い方に、案の定、まるで歌を奏でているような口調と共に、理屈の言葉を並べた返答が返ってくる。

「雨が降る現象って分かる？ 太陽の熱で暖められた大量の水が蒸発する事により水蒸気が出来きて雲が発生するの。その水蒸気が空

気で冷やされる事により水に変わる。あれだけ広範囲の大地を雨の水で浸すのよ？ それを可能にするには、やっぱり海が存在が必要って事じゃない」

「君の妄想には付いていけないよ」

やれやれ、と首を振る。視界を彼女の姿より横へ移動させて、遥か奥にそびえ立つ、全長五〇〇メートルの壁を見据えた。

そもそも、閉鎖されたこの国に入口も出口もないのに、あの巨大な鋼鉄の壁をどうやって抜けるというのか。

と、内心でそう思っていると彼女が俺の方に振り向いてきた。

見ているだけで癒されそうな彼女の顔が、今では少しだけ頬を膨らませて不機嫌になっている。

どうやら、ちょっとだけ怒らせてしまったようだ。

「せっかく教えてあげたのに。そんな態度をする人にはもう何も教えてあげないから」

ぶいつ、と俺に背を向ける。こうなると彼女は一向に俺の話を聞かなくなるのだ。

今日はこの後で大事な仕事がある。彼女の不機嫌が直らないとなると、個人的にとっても困る。

「よし、分かった」

「何が分かったのよ？」

俺の言葉の意味が理解出来ない彼女は、先程よりも不機嫌そうに顔をしかめている。

「君がさっき言った事さ。海が見たいんだろ？」

予想にもしていなかったのだろう。膨れた彼女の頬が、一瞬にして元の状態に戻った。きよんとした目を俺に向けている。

「俺が連れて行ってあげるよ」

予想にもしていなかっただろう台詞に、心底驚きを隠せない彼女は、両目を何度も見開いている。しかし、それも数秒が限界のようで、半分開いていた口元が吊り上がる。

「……ふ、ふふっ」

「って、何がおかしいんだよ」

「ごめんごめん。あまりにも唐突な事を言うから」

「なっ、冗談なんかじゃないってっ」

「うんうん分かってる。絶対海に連れて行ってくれるんだよね？」

「絶対信用してない顔だ」

「信用してるしてる。じゃあ、指きりしましょうっよ」

そう言つて差し出される小指に、後頭部を搔いて恥ずかしさを紛らわしていた俺は、指同士を絡める行為に高揚してしまう。空が茜色に染まる夕焼けだった今だからこそ、誤魔化せられたが。

渋々指を絡めると、彼女は心の底から喜びを浮かべている。この優しい笑顔を何度も見たいから、この人を悲しませたくないから、俺はここにいる。彼女を護る事が、彼女を脅かす脅威を全て排除していく事で、もう一度、その微笑みを向けてくれるのならば、俺という存在意義が確かに在ると認識出来る。

「約束ね？」

「ああ、約束だ」

そして、俺と彼女は約束を守る為、指きりをした。

小指から伝わる彼女の温もりと、その微笑ましい表情は、まるで小さな太陽のように思えた。

そう——彼女の存在は太陽なのだ。

全ての人に愛される存在。人が生きていくに必要な空気と同じように、この国の人々には彼女は必要な存在なのだ。この人を護りたい。その意地っ張りな性格も、一人だと不安になる弱さも、全て護れる強い男になりたいと。

絶えぬ戦に疲弊を覚え、一層……背負わされた重荷全てを投げ捨てたいと考えた事もあった。

何を信じ——何を想い戦ってきたのか。ある者は愛する者の為に。

ある者は富豪と権力を手に入れる為に、その身と命を削り戦い抜いてきた事だろう。全ての人間が理想を胸に抱いて戦場を駆け回る訳ではない。

戦いに身を投じ、他者の血に汚れた己の手が、かつて思い懐いていた正義や志が色褪せていく現実には、誰もが葛藤と矛盾に苛まれてしまう。

それでも——絶望という名の海から這い上がれなくても、己の人生に抗う術が見つからなくても、最期の一瞬だけは、全てを投げ捨てても安堵と幸福を胸に眠る事を、赦してくれると信じている。

悠久の時を、いつまでも健やかに、この人の隣で限りある時間を噛み締めながら過ごせれば、絶望と混沌に塗れた、こんな腐り切った世界でも、安らかな時を過ごせられると。

微笑みを浮かべていた彼女が、何か思いついたような顔を見せる。

「どうやら、貴方を探してる人がいるみたいよ」

俺より先に『感知』したようで、繋いでいた小指をそっと離れた。伝わっていた温もりが、すぐに消えていく。

「気を付けてね」

ひだまりのような笑みに隠された不安の表情。彼女がこのような表情をするのは初めてではないが、今のはいつもと何かが違うような気がした。

俺は敢えて気にしない素振りを見せ、笑って返す。

「ただ討伐隊として行くだけだよ。別に本格的な戦闘になる訳じゃない。簡単な任務だ」

「命の奪い合いを『簡単』なんて言葉で言い包めたらダメ。もし流れ弾が貴方に当たったらどうするの？」

俺が身に纏っている甲冑は銃弾すら弾く程の硬度だが、頭に当たったらどうするのか、と心配してくれているのだろう。

「そんな馬鹿な死に方したら、俺達の存在価値そのものに意味がなくなってしまうだろう。『物理的な攻撃で俺達が死ぬ筈がない』んだからさ」

だが、俺の言葉が気に食わなかったのか、それとも単に呆れただけなのか、俺に向けられる彼女の視線がとても冷たい。

「そういう言葉を言う人ほど、すぐに死んじゃうんだよねえ」

「遠くを見つめながら呟くの止めてもらえないか？ さり気なく怖い」

毎度毎度の事だが、彼女には振り回されっぱなしの自分も、懲りない性格なのだなと思ってしまふ。そして今も、俺が反応に困っている姿を見て、耐えきれなくなって吹き出す始末だ。

「ふふっ、これも『冗談』」

「うっおい……」

「あつ、それよりもいいの？」

「何が？」

「このままここにいて大丈夫？ あの人、ずっと探し回ってるよ」

言われた途端、背筋が凍る。すぐにあいつがどこにいるのか探し出す――いた。

ヤバい。物凄く怒ってる……。平然とあいつの前にこのこと現れたら殺されそうな勢いだ。

「悪い。もう行く」

そう言つて、俺は彼女に背を向け、一步駆け出す。

「待って！」

呼ばれた反動で思わず振り返ってしまう。

「さっき言つた事、絶対だからね」

「……ああ、任しとけ」

「絶対だよ」

手を振る彼女を目に焼き付けながら、俺は急いで駆けて行った。

一人になった彼女は、空を仰いで呟く。

「雨が、降りそう——」

――。

もはや肉眼では捕えられない程の遙か上空。音速を超えて飛翔するその姿は、まさに空の王者と呼ぶに相応しい雄大を持つ。

分厚い雲が視界を遮っているため、パイロットの視界に映る外の世界は暗闇でしかなく、レーダーも無線もその機能を失われている状況は、あまりにも危険区域でもあった。

けれど、パイロットは至って冷静にこの状況を見守っていた。通信機器のアクシデントは偶発で起こったものではないのだ。

分厚い雲を抜けると、上空を飛ぶ計六機の戦闘機——F-15は、夜月によりその姿を現せた。ようやく回復を見せた通信機能を使用し、パイロット達は早速言葉を交わし始める。

「ブラボー1より各機。もうすぐ目標地点の上空に到着する。こちらの機影が捉えられる事はないと思うが、万が一という事もある。その時は分かってるな？」

返事はブラボー3から返ってきた。

『まあ、見つかったも奴等にはどうする事も出来ないと思いますけどね』

「万が一って言ってるだろ……と、そう言ってる間に見えてきたぞ」

ブラボー1のその言葉に、パイロット達は一斉に外の下に目を向ける。彼等の両目が、恐らく人生で最も大きく見開かれた事だろう。ある者はその光景に一瞬、操縦桿を握り締める事も頭から忘れてしまい、ある者は自分の任務が何なのかを消え去ってしまう程のものであった。

それは、果たして何と表現すればいいのだろうか。否、言葉のみでこれを表現出来る人間が存在するだろうか。

『凄……』

ブラボー2から漏れる声に、彼等はこの時だけ互いの意思を共有しているような心境を覚えた。だが、ただ一言、凄いで済ます事は、この光景に対して、そしてこの光景を生み出した者達への冒瀆だ。

遥か五〇〇前――。

世界から、世界地図からその存在を消された国――通称・ロストヘブン。その中心地こそロストヘブンの首都・巨大都市エデンの直上を彼等は飛翔している。

夜闇を照らす都市の光一つ一つが、七色に光るキャンドルだった。『百万ドルの夜景』とはまた違う。この壮大を言葉に表すとなれば、

彼等が見ているそれは『世界』だ。地球にもう一つの惑星が、そこに存在していると断言出来よう。

『こんな、こんな都市、見た事ねえよ……。奴等、この五〇〇年でとんでもねえモノを造りやがった……！』

この五〇〇年間、この大都市を見た者はおろか、上空から見下ろす者などいない。それを彼等は、五〇〇年の暗黙の規則を破ってまで来なければならなかった理由――。

見惚れる為に来た訳ではない。時刻は残り二分で深夜〇時。この時刻に、作戦は実行へ移るのだ。

「ブラボー１より各機――作戦を開始する」

先程まで感激に浸っていたパイロット達が、彼の命令に瞬時な対応を見せた。

六機のF - 15の後方。同じく分厚い雲の中を潜ってやってきた戦闘機よりも巨大で闇色に染め上げられた機体。

機体全てが『翼』のような異常にも見える形状は『B - 2』と呼ばれる爆撃機が、左右に展開したF - 15の中心位置で並行して飛行する。

パイロット達の無線の向こうから、B - 2に搭乗する若い女の声が聞こえてきた。

『こちらアウター機。閉鎖国ロストヘブンまでの護衛に感謝致します』

「こちらブラボー1。礼には及ばない。逆に俺達のチームを護衛役に選んでくれて感謝したいくらいだ。こんな凄い都市を見れたんだからな」

だが、その美しい都市を見れるのも、これが『最後』だと思うと、無性に胸を締め付ける痛みが走る。

『では、作戦を開始します』

無線が切られた。途端、B-2の下部から何かが投下された。彼等の任務内容——国際会議により決定された極秘作戦。

それは、人類の脅威と判断された、大都市エデンの壊滅だった。

誰もが呼吸を停止させた。

B-2から投下された兵器が、吸い込まれて行くように大都市エデンの中心地へ落下していき……その一秒後、美しかった光景が瞬間に一変する。

まるで都市の中心に、小さな太陽が誕生したようにも見えた、が、灯された光は、静かに破壊と轟音を拡大させていく。

突如と降りかかる暴威に、エデンに住まう人々は成す術もない。

先程までの歓喜な声はどこへ行ったのやら。手を下していないとはいえ、パイロット達はこの一件に関わっているという実感に、改めて恐怖していた。

また、無線から女の声が、僅かにキーボードを叩く音も聞こえた。

『ミッション開始時刻、午前〇時。大都市エデン内の研究施設及び軍事施設の破壊を確認。並びにロストヘブンの権力者数名排除終了。民間人死傷者及び負傷者数不明』

キーボードの叩く音が消えた。

『ミッション——コンプリート』

――。

針で刺されるような鋭い痛みが全身に走る。

身体感覚が無いと錯覚してしまう程、身体が冷え切っているのだと気付くのにどれだけの時間を費やしたのだろう……。

ゆっくりと瞼を開ける。

目に映る光景は闇。漆黒の空から降る雨はとても汚れているように見えた。

口を開けても呻き声すら出ない。手を動かそうにも、指すら動かせない状態に陥っているのは……何故か、思い出せない。

何があったのか……。ここはどこなのか……。何故自分は死に瀕しているのか……。

思い出そうとしても『自分が目覚めた時』からの記憶しかない。

思い出せない……。

自分が一体何者なのか――。

名は？ 家族は？ 家は？ 友人は？

何も思い出せない……。

空いた穴はとても大きい。

大切な何かを奪われた喪失感。己の身体の臓器全てが取り除かれたように、今まさに生きているのかさえ分からない。

本当は死んでいて、霊となった自分が、ただ空を見上げているだけなのかもしれない。

何も、ない。

全てを諦め、もう一度目を閉じようとした、その時だ。

名が無い——その女性は言った。

雨の音とは別に、地面を擦る音が耳に入った。僅かに呻き声も聞こえていた。

ゆっくりと、首を横に曲げる。

「君には、名前がある。だけど、私には名前がない」

そこには、女性がいた。女性の手と自分の手との距離は拳一つ分しかない。

だが、その拳一つ分の距離でさえ、縮める事は、もう限界だった。

「私は君の名を知っている。知りたいのなら、お願いがある」

僕は黙している。女性の言葉を遮らないように。いや、正直に言うのと、言葉を交わすのも出来ない状況だった。

「私に、名を付けてほしい」

そう、女性は言った。必死に喉から絞り出す最後の言葉のように……。

女性の目を見つめた。女性も同じく瀕死の状態。ボロボロになった身体でも、その瞳には揺るぎない決意のようなものがあつた。

僕は見据えた。言葉が出せない代わりに、女性の問いに答えるよう

に。

一瞬——女性が微笑んだように見えた。その笑みを、僕はどこかで見たような気がした。

「ユウヤ」

ユウヤ……。

それが僕の名前——。

ようやく人間らしさを持てる、僕自身を証明する名だった。

なら、次は僕の番だ。目の前にいる女性に名前を付けなければならぬ。

血のように紅い髪を持つ女性を見つめる。身体中に傷を負い、泥まみれになった姿でも、僕は純粋に美しいと感じた。

唇を懸命に動かす。無論、言葉は出ない。それでも、必死に伝えようとしていた。

すると、女性は優しい微笑みを浮かべた。

「エレン……か。良い名だな」

――。

閉鎖された国。世界から消された国を、人はこう呼ぶ。

失われた楽園――ロストヘブン――。

各国から監視され続けている、自由のない国。

もし戦争を起こそうというのであれば、ロストヘブンを囲む隣国から軍隊が押し寄せてくるのだ。

戦争に参加しない国は、前線で戦う兵士の為に物資を送る仕組みになっている。

そうなれば、ロストヘブンは一瞬にして灰の海と化すだろう。

いや、そもそもこの国から戦争を仕掛ける事など不可能だ。

何故なら――。

国境にそびえ立つ巨大な壁。

全長五〇〇メートル、厚さ一五メートルもある鋼鉄の壁は、ロストヘブンそのものを幽閉する為だけに造られた代物だ。

破壊は不可能。故に、この閉鎖国から脱出する事は不可能という訳

だ。

各国はロストヘブンには一切関与しない。ロストヘブンも各国に一切関わらず、例え何年何十何百年経とうが、壁の向こう側には興味を持たないという教育を施すようになった。

何故、興味を持つてはいけない？ 何故、閉鎖されているのか？

その疑問は、思っても決して口に出してはならぬ決まり。

そういった数々の掟を縛り、既に五〇〇年の月日が流れていた――。

外の世界（前書き）

まさかプロローグで『完結済』になっていたとは……。しかもそれに気付くのに数日かかったとは——読者さん以上に作者がテンパりましたw
以後気をつけます。申し訳ありませんでした。

外の世界

「呆れるくらいの賑やかさだな」

全長二メートル程の銅像は、かつてこの大都市エデンの創設者と言われている——シャーロット・ヴァン・スタードの銅像だ。

ロストヘブン——その首都である大都市エデン——そして五〇〇年前、世界から一切の関わりを禁じたのも、全ては彼から始まったとされている。

その銅像に背を預ける一人の赤い長髪の女。一言で言えばロングドレスを身に纏っているとも思えるが、実際は様々な服やアクセサリを自分なりのアレンジを取り入れて作った私服だ。

日差しを遮る為、麦わら帽子を被っている……のもあるが、実際は顔を見られたくないからである。

ここは、とある都市の昼下がりの繁華街。

建造物の入口や窓に多様な色彩旗が飾られ、様々な店が並ぶ大通りの街。雲一つとない満開の空を見上げれば、誰かの手から放れてしまったのだろう色鮮やかな風船が天高く昇って消える。大勢の人間の歓喜の声、雑踏や様々な物の音が音楽となり、今日は祭りの開催日かと勘違いする程、女がいるその場所には多くの人間が集まっていた。

呆れるくらいの賑やかさ、と皮肉を口にするだけあって、遠くの方から男の怒鳴り声や子供の駄々を捏ねる泣き声が、女の鼓膜を人一

倍刺激する度に、彼女の口から何度も舌打ちが零れていた。

店の商品が盗まれた。財布を取られた。子供が行方不明になった。

など、一時間に一〇〇件以上の事件が毎日起きているこの状況では、警備の人間も手が回らなくなる。

最悪、政府に所属する兵士達も駆り出される始末であるのだが、本来、彼等の役目は国の最高権力者達を命懸けで守護する為の剣なのだ。敵を討ち、あらゆる障害を徹底的に排除するスペシャリスト達なのである。

それが、警備の手伝いという、盗人を捕まえたり悪戯した子供を叱ったり、と下下しもしもの相手をしなければならぬというのは、彼等の威厳や平民に対しての示しが付かなくなるのは当然の事だった。

自分の事で精一杯。他の事に目を向けていられなくなる。

つまりこの状況、大都市エデンに住んでいない外の人間が『侵入』するには、とっておきの時間帯なのだ。

「平和でいいじゃないか。争いのない平凡な日常がここにはある」

同じように銅像に背を預ける男。

女性と背を合わせるように、顔を合わせないように。自分達が知り合いだと感づかれないように。

男の言葉に納得いかない様子で沈黙を保っていると、ふと、女の視界に幼い少年が映った。少年はただじっと、穢れを知らない純粋な

瞳で女を見上げている。

視線を逸らしたのは女の方だった。あどけない表情を見せる少年を見続ける事が出来なかった。

遠くの方から女性の声が聞こえた。この少年の母親が、彼の名を呼んでいる。

やがて少年は女の前から走り去って行った。安堵の溜め息を吐いた時「お姉ちゃんバイバイ」という言葉が耳に聞こえた。

顔を上げて見ると、遠くの方で母親の隣にいる少年が、笑みを浮かべながら手を振っていた。

「嫌な過去は忘れて、こうして幸福の日々を送っているんだな。この街の人間は」

「嫌な出来事は無意識の内に忘れるものだ。人間の脳はそういう作りになっている。どうした？ 不満そうじゃないか」

女は黙を通す事を決め、次に脳内から先程の少年の記憶を消した。穢れを知らない人間が嫌いだった。闇に埋もれ、血と憎悪で穢れている自分には相に合わない。

「向こうでの暮らしはどうだ？ 相変わらずか？」

男は話のスタイルを変える。用件や本題を無視したやり方に不信感を抱かせたが、必要以上の反応は返って身を削る行為に等しい。女は男に合わせる事にした。

「変わらないよ。ここのように賑やかではないが、それでも和やかな暮らしは送っているつもりだ」

「つまり、か。お前の身の周りで『発作』を起こした者は？」

話の内容を急速に転換させている……だが、合わせるしかない。

「今のところいないな。いたとしたら、そんな所にいないですぐに別の場所に移動してる」

発作という単語に、女は更に目を伏せた。

三年前。大都市エデンは悲劇に苛まれた。

被害区域はほぼエデン全域。死傷者は二〇〇万人を超え、一瞬にして全ての人間に恐怖と絶望を植え付けた地獄絵図。

その三ヶ月後に報道された内容は、大都市エデンが各都市へ供給する設備の一部に故障が発生したという。すぐにその設備を収納している施設内の従業員に避難命令と、その設備を緊急停止させる手段を迅速に取ったが、制御を失った設備を停止する事は出来ず、最悪の事態を招いた。

設備の爆発と共に、各都市へ送る膨大なエネルギーが火薬剤となり、更に供給されているエネルギー自体が人間に被害を及ぼす『有害ガス』が含まれていたという。想像を超える巨大な爆発と共に、その有害ガスが各都市にも拡散してしまった事実は、大都市エデンのみならず、ロストヘブン全民を恐怖と絶望を植え付ける羽目となったのだ。

有害ガスに汚染された人間は体内に毒を持ちながら、周囲にガスを撒き散らす細菌兵器と同じだ。

いずれ大都市そのものが死の都市と化してしまうと恐れた政府の権力者達は、この状況を重く考えた結果、汚染された人間を都市から追放する事を決断したのだ。

汚染された人間に手の施しようがなかった。追放された人々に待つているのは死だ。

死は突然とやってくる。まず、原因不明の発作が起きるのだ。その後は、死を迎えるまで苦しみ続けるしかない。

いつ発作するか分からない症状に怯えながら暮らしている外の人間達。

勿論、何もしない、何の責任も取らない権力者達に怒りを見せていた。

追放された人間の中には身内もいただろう。家族や恋人もいた筈だ。そんな人々が追放されるといふ時、恋人は、家族は、誰も止めなかったという悲しい事実のみが残されてしまったのだった。

「あの事件でエデン国民の二割が死んだ。そして汚染された人間を見捨て、追放された人間を忘れて楽しそうに暮らしている」

「仕方ないさ」男が言う。

「人は弱い。心も。他人の命よりも、自分の命が大事さ。誰でもな」

「貴様に言われたんじゃ、この国も終わりだな」

「俺一人の言葉で国を動かせるのなら、とうに動かしてるわい」

男は胸ポケットから煙草を取り出した。雑踏で騒がしい中、ライターの着火音だけが異様に響いて聞こえた。

話が一段落ついたと僅かに緊張していた事もあり、肩の力を抜くように深呼吸したその時だ。一人の兵士が、女の肩にぶつかった。その衝撃で、被っていた麦わら帽子が落ちてしまった。

兵士は慌てて謝罪した。女は急いで帽子を取ろうとしたが、先に兵士に取られてしまう。

地面に落ちたのを気に掛けているようで、汚れを落とすように帽子を軽く叩く。

兵士と、目が合った――。

一瞬、兵士の身体が固まった。目を大きく見開き、じっと女を見つめている。

――気付かれたか。女の正体に。

女は悟られないよう、視線を逸らした。

もし気付かれたのなら、この兵士を一瞬で黙らせる必要がある。拳に力を込める。緊迫した空気は男にも伝わっていた。

……予想外な展開だった。

兵士がまた、すみませんと謝った。こんな美しい女性を見たのは初めてで、とお世辞まで言う。

帽子を渡した後、一礼して去って行った。自分が侵入者だという事にも気付かずに。

「あいつはどうだ？」

肺に溜まった熱い空気を焦りと共に吐き棄てると、何も無かったかのように男がその言葉を口にした。ここで必要以上に気に掛けていたら、逆に怪しまれると考えたのだろう。

女も一呼吸置いて、一度気持ちを落ち着かせた後、ゆっくりと口を開いた。

「相変わらずさ。呑気なままだ」

「最近遠くの街で暮らしていると言ったが、仲良くやっているのか？」

「あいつはあの性格だし、すぐに街の人間と打ち解けていたよ」

「お前は？」

男は分かって聞いている。

「私の性格から、仲良くしようとする人間がいるか？」

「たまにお前と話していると、斬り殺されそうな錯覚に陥るからな」

「それはお前が私に失礼な事を言うからだろっ」

女は恨みが籠った口調で言うと、男はふっふっふつ、と笑うだけだった。呆れ半分、女は少し遠くの方に目をやった。

「養育施設に入れてから、あいつは少し変わったかな」

「養育施設？　ここで言う学校のようなところか？」

「いいや。親のいない幼児達を引き取って世話をする施設だ。あいつは私とずっと共にしてきたからな。少しは他人と接した方が良かったろっ。噂ではこの数日、町や村を襲う賊がうろついているとよく聞く。一人でいさせるより誰か一緒にいた方がまだマシだろっ」

それに、と女は付け加えた。

「……最近、近所に住む女と仲が良さそうな感じだし」

言うてから、女は我に返った。口が裂けても言うてはならない事だったと後悔を覚えるも、もう遅い。

「ほっ……」

やはり、と自分に悪態を付けた。女の脳裏に、男がにやけている表情が目に見えかぶ。

「嫉妬か？」

言われて、女はより深く顔を俯かせた。血液が沸騰しているのか、

身体の体温が急激に上昇している。通り過ぎる子供の目が女の顔に止まる。赤面している顔を誰かに見られるのは屈辱的だった。

「何をそんなに恥ずかしがる事がある？ お前もその男勝りな口調を無くせば、ただの女だ。男に恋心を抱くのは何も不思議な事ではない。まあ、同じ感情を同姓に抱くのは世間的にどうかと思うがな。それも俺はアリだと思うぞ」

「変態が。それ以上私を侮辱してみる。この銅像の首を斬り落とし、代わりに貴様の首を置いてやる」

「創設者ですら容赦しないのか、お前は」

男は一先ず会話を止めた。冗談でも笑えない女の台詞に、長い付き合いであつても肝が冷えたのだろう。

「いい加減話を戻せ。貴様と話していると疲れて仕方ない」

苛立った口調は、もはや不機嫌を通り越して怒りそのものを具現化させていた。殺意の刃が肌を突き刺さる感触に、男は煙草の火を消して、一度遠くの方を一点に見つめた。

どう言おうかと考えたが、それも一瞬の事。全て隠さず明かそうと決めた。

「お前のIDでも無理だった」

「馬鹿な」女は少し興奮気味に言った。先程の怒りは驚愕に掻き消された様子だった。

「『六人の覚醒者』のIDだぞ？ 何度も確かめたのか？」

「無論だ。だが、三年前のあの事件以来、セキュリティがより厳重になったのも事実。それにお前は『既に死んでいる身』だ。IDもパスワードも『お前が存在していた全て』を書き換えられているのは当然だろう」

実際、そのIDは女の所有物ではない。だが、命懸けで手に入れたIDが無価値へと変わってしまった事に女は下唇を噛み締め、悔しさのあまり、握り締めた拳がわなわなと震える。

「『三年前の惨劇。あれは事故ではない。ロストヘブンには何か裏がある』……お前が言った言葉だ。いくら歳を取ろうとも、今でも一語一句覚えている」

込めていた力を抜いていく。少し冷静になれ、と女は自身に言い聞かせた。

「まだボケていないという事だけでも感謝するよ。あの事件の真相に辿り着ければ、同時にこの国が企てている計画も見えてくる」

「だが、あれから三年。未だ何一つ手掛かりは掴めていない」

男の言葉から、沈黙が続いた。沈黙を破ったのは、女からだった。

「何が言いたい？」

「もう、止めないか？」

予想はしてただけに、男の言葉は女の胸に、どんなに強力な剣よ

りも鋭く突き刺さる。

「お前も、俺も、今まで危ない道を歩き続けてきたが、もうお前を庇いきれない所まで来ている。既に俺も政府から目を付けられている状況だ。お前に加担していると知られればどうなる事か。お前も、共に暮らしている奴も、命を狙われる事になるぞ」

「何を言うかと思えば……私もあいつも、着々と準備を進めているんだぞ。この三年の月日を思えば、今更白紙に戻せられるか」

「奴等が何を企んでいようが、俺達にはどうする力も持つてはいない事は、誰よりもお前自身が理解しているんじゃないのか？」

女は何も答えない。次第に足音が聞こえた。

「平凡な日々を送っているのだろう？　なら、その今を大事にすればいい。忌々しい過去は忘れてな。お前も、あいつの事を本当に好いているのなら、今の生活を守るべきじゃないのか？」

遠ざかっていく。

「定期的に会うのは続ける。情報の交換も必要だからな。が、危ない橋を渡るのは、もう終わりだ」

やがて、男の足音が他の雑踏の中へと消えていく。ただ一人残された女はしばらくの間、同じ姿勢のままだった。

「止められないさ」

呟く。己の決意を思い出すかのように。

「あいつには、幸せになってもらわなくては……困るんだ」

その言葉を、胸の中で抱く決意を噛み締めるようにして、女は足を踏み出し始めた。

無事、大都市エデンから抜けた女の脳裏に、男の言葉が波紋するようには蘇る。

守りたい人がいるのなら守ればいい。大事にすればいい。

その人の大切な居場所があるのなら護ればいい。大切にすればいい。自分には、守れるだけの力があるのだから。

大切な人の笑顔を、暮らしを……だが、守るだけで、本当にいいのか……？

「いいや、それだけじゃ、駄目だ……」

己に言い聞かせる。守るだけでは駄目なのだと。

恐れや恐怖に立ち向かう事もまた、必要なのだと。

……でも、今はまだ、この生活を続けていたい。

それが女の本音でもあった。誰にも打ち明ける事のない、心の底から想う本心だ。

そう考えている内に、ようやく女が住む街に辿り着く。都会とは呼

べない、緑と自然と共存する、見慣れた景色は心を落ち着かせた。

いや、そうではない。

反対に、胸が高鳴っている。その証拠に、足取りは先程より速く、軽い。

自分の帰る場所に彼がいる。自分の身近に常に彼がいる。朝一番に会うのは彼で、夜は最後に「お休み」を言い合う。

彼が傍にいる。一緒にいる。恋人同士という訳ではない。互いに好意を抱いている訳でもない。

まして、彼には自分よりも、ずっと素敵な相手がいる……。

「片想い」という言葉は、残酷な言葉なのだと、そう女は思っている。

それでも、彼と共に過ごせられるのなら、これ以上の贅沢はいらない。

今までが、贅沢過ぎるくらいなのだから。

彼が待つ家に足を進めていた、時だ。

——胸が痛い。張り裂けそうに痛い——だが、その痛さを感じる資格は己にはない。

前の方から、腕を絡めて二人仲良く歩いてくる男女。

女の方を見る。男に身も心も捧げているとしか思えない仕草と態度。この男の為ならば何でもする妖艶な雰囲気漂わせている。

楽しそうに、まさに恋人同士が会話するように喋っている。話の内容は聞こえない。

微笑み合う二人は、まさに恋人同士にしか見えなかった。

外の世界 2

原型を述べるのならば、それは形を持ち得ない物質だった。

成人の身体の六〇パーセント以上が水で出来ているといっているのであれば、それは間違いなく水分一〇〇パーセントの人間だった。

骨格、内臓、皮膚、筋肉など存在しない、水によって形成された生き物は、指先一つ髪の毛一本が血の通った人間と同じ動作を繰り返している。

当時は常識を覆した異形を目の当たりに、驚愕のあまり啞然と立ち尽くしているしか出来なかった。しかし、それも幾度とほぼ毎日のように『じゃれあう』と、慣れもするし愛着すら湧いてくるものだ。

周りを木々で塞がれた静寂の大自然。今にも子鳥達の歌声が聞こえてきそうな、心の底まで爽快感が透き通る緑と青の景色。湖の中央、水面の上に佇む『彼女』は、空気椅子に座り込むような姿勢を保ち、腕と足を組んで俺を見据えている。

直径五センチ程の水玉の群れが彼女の周囲に浮遊し停止しているかと思えば、誰の手も加えられていない筈の水が、今度は細長く伸ばし、一本の小さな槍のような形状を連想させられる。

計一二本もの『水槍』の矛先が沿岸を疾走する俺へと向けられた刹那、水槍は表面に波紋を打ち付けた後、弓矢の如く発射され、即座に加速して俺の全身を串刺しにしようと迸る。

空気を斬り裂く脅威に疾走を止め、所持していた剣を握り締め迎撃

に転換する。

まずは二本。だが、一本目を剣で叩き潰したとしても二本目に対する防御不可と判断し、即座に身を翻して水槍の軌道から回避に成功する。

水だからといって侮ってはならない。仮にも槍に似た形状は、その先端部が鋭い刃物と同然であり、人間の身体を貫くだけではなく大木ですら容易に貫通する威力を秘めているのだ。

俺の身体の横をすり抜けた二本の水槍が、目標を失いただ飛翔し大木を貫こうとした刹那――。

水槍は大木の側面に当たる寸前で飛沫へと変化し、その周囲が水面に波紋を浮かべるように空気にも同じ波紋が生じた。

その現象を意味しているのは、この湖の周囲を『風の結界』で隔離しており、どんな障害や脅威ですら通過を許されない鉄壁同然の代物なのだ。言わば、この湖と沿岸は『訓練場』であり、部外者の立ち入りを禁じた場でもある。

疾走する俺に更に三撃の水槍が襲い掛かる。一本目は足を踏み留めて眼前を通過する光景を見届ける。

同時に二本目の接近を肌で感じ取り、剣を振り上げてその脅威を排除に成功した。再度足を駆り立てて疾走を開始させ、三本目は背後をすり抜けて結界により掻き消される。――が、問題は次だ。

残る七撃が、未だ彼女の周囲を浮遊し、発射の瞬間を待ち構えている。正直、先程の反撃と回避は瀬戸際だった。

つまり、あれが四撃発射されていたのなら、俺は今頃串刺しに遭い、絶死していた事だろう。

となれば、次の攻撃は、文字通り命を懸けての攻防という事になる――。

七つの水槍が、一斉に発射される。だが、目標たる俺は一切の構えもなく、眠りに就くように、ゆっくりと瞼を閉じた。

虚無。即ち無心の極致――。

研ぎ澄まされる感覚は、無心になればなるほど冴える。

手に持った剣は身体の一部と認識し、風の流れに抵抗しない。

己という存在は自然となり、全と化す。

木となり、石となり、川となり、空気になり――それは同化という名の一体感を具現とした理。

欄と見開いた瞼の奥の双眸で見定めると、身体を貫かんとする七撃の脅威が次第に飛翔する速度を落としていく。

水槍は最終的に速力を無くし、俺の目の前で停止する現象に至った。それだけでは終われない。まだ勝負は着いていない。この脅威達を排除し、彼女に一矢報わなければ決着しないのだ。

対象を水槍のみ固定し、その他の障害物及び視界及び体感する大気、温度、音、臭いを遮断する。そうする事で、俺の脳は水槍以外が『

理解出来ぬ物質』へと見えてしまう。

伸ばした手を、指を内側へ納めていく。強く握り締めると、全ての水槍が一斉に飛散した。

瞼を閉じ、虚無を解除する。大気を感じ、温度を体感する。緑の臭いが、草木の擦れ合う音が、全身に染み込んでいく。

湖の中央で観察するように、彼女はただ眺めていた。水のみで構成された彼女に、言葉も目もその身に宿す感情も無いのだろう。

だが、その口元が不敵に微笑みを浮かべているのは、少しは成長したな、と言っているような気がした。

——刹那の内に、水で形成していた彼女が、瞬く間に水面に落下した。結界の外から人の気配を感じ取ったようだ。

俺は一呼吸置いて、後ろに振り向いた。

肩辺りで整った、深い青色の透き通るような髪が揺れている。蒼穹のように蒼い目とくつきりとした綺麗な鼻。儚げな雰囲気漂わせている彼女——ユカは爽やかな笑みを俺に向けていた。

「やあ、ユカ」

「こんにちは、ユウヤさん」

挨拶を交して、俺はユカの側まで寄った。彼女はこのファールシル街の住民で、その可憐で優しい雰囲気もあり、街の人気者でもある。

そんな彼女が、ほとんど人の来ないこの場所にやって来るというのは、何か用事があるのだろうか。

「お稽古は順調ですか？」

手に持った剣を見ての感想なのだろう。

それにしても、真剣を持っているのに『お稽古』と言うのは、お遊戯程度にしか思われていない様子だ。

先程まで生と死の瀬戸際を潜り抜けてきたとは、さすがに説明しても理解の度合いが桁外れている。俺は苦笑を浮かべつつ柄を持ち直し、剣の刃をユカの反対側へ向けた。

「ユカは、どうしてここに？」

そう言うと、彼女の頬が少し赤く染まる。僅かに目を伏せて、潤んだ唇が小さく開かれ、宝石のような輝きを帯びた瞳を上目遣いで俺に向けてきた。

「子供達の為にお菓子作っただけです。でも、ちょっと作り過ぎちゃって……是非ユウヤさんに食べてもらいたくて」

ぎゅっと握り締めた拳を胸元に当て、少し強張ったような顔付きを見せる彼女は、とても一六歳とは思えぬ妖艶な雰囲気漂わせていた。

彼女ほどの美女が、一体どれ程の男を魅了し、告白してきた男達を断って来たのだろうか。そんな彼女の好意が、いま誰に向けられているのか、解らない筈がなかった。

「お言葉に甘えて、頂こうかな」

「本当ですかっ!？」

身体が宙に浮いてしまっんじゃないかってくらいに、ユカは背筋を張って顔を見上げた。歡喜に染まる彼女の表情を見ると、自然と俺の口元を和らいでいく。

向日葵のようなユカの笑顔は、この街の太陽そのものだろう。ユカが笑えば皆が笑顔になり、悲しめば同時に全員が暗い顔になる。

「早速、行きましょっつ」

そう言って歩き出した時、ユカはおもむろに俺の腕に自分の腕を絡めてきた。大胆な行動に出た彼女に動揺するも、俺も何も言えず、そのまま腕を預けてしまう。

ユカとの付き合いは長い訳ではない。

今から三ヶ月前にこの街に引っ越してきた俺達は、初めの頃は正直、街の住民に嫌われていた。外の人間というだけで、街の人間から異質な、親の敵を見るような目は、今でも鮮明に焼き付いている。

でも、目の前にいる彼女――ユカが、俺達に優しく接してくれていたのがキツカケで、徐々に街の人々も、俺達に対する態度も変わり始めてくれた。

それこそが、このファールシル街において、ユカの人気の表れとも言えるのだろう。

立ち止まったユカの腕に引っ張られ、俺の視線は彼女へと向けられる。

「どうした？」

だが、返答が返って来ないだけならまだしも、彼女の目の周りの筋肉が異様に強張っているのが気掛かりだった。

不審に思い、俺は彼女と同じ視線の先に目をやった。

灼熱の如く燃え上がるような赤い髪が、風に煽られて滑らかに舞っている。ユカの髪と瞳が潤いを持つ大海原と表現するならば、彼女は大地を煉獄に変える業炎そのもの。

俺の同居者であり、三年前から常に助け合いながら暮らしてきた唯一の家族。

「エレン、どこかへ行っていたのか？」

俺の言葉に、だがエレンからの返事がない。彼女の視線は俺でもユカでもなく、絡めている腕に向けられていた。

「あつ……と」

罰が悪そうに、ユカは腕を解き、俺から一步離れた。気まずそうに顔をエレンから逸らす。

そんなユカを見ると、何故か俺まで申し訳なさそうな気分、居心地の悪さを感じずにはいられなかった。

「えっと、その、おかえ——」

「ユウヤ。鍛練は済んでいるんだろうな」

相変わらずの冷たい口調。若干睨まれている所為もあり、慌てて言い訳を思考する。

「今日は……もうこれで終わろうかな、と」

「成果は？」

息つく間も与えてはくれない……それ以上に、今日はいつにも増して強く当たっているような気がする。

「いや、うん、まあ」

相槌を打つ誤魔化そうとしても、彼女には一切効かない事は経験済だ。しかし、あと一歩のところまでユカに邪魔されたなどと、言い訳すら出来るものではない。

だが、エレンは目を閉じ、深い溜め息を吐くだけだった。呆れた表情をされるのも辛い。

「今日はもういいよ。君にも休息は必要だからな」

予想外の言葉に、俺は開いていた口が塞がらなかった。

「エレン……」

「いや、毎日が休息みたいなものだな」

それを言われると言い返す言葉もない。

「これから家に戻るのか？」

一瞬、彼女の瞳に期待が浮かんだ……ように見えた。

俺は申し訳ない気持ちを覚えつつ、言った。

「いや、ユカが作ったお菓子を今からご馳走になる事になって」

気まずい空気は一向に晴れない。怒られそうな予感がひしひしと伝わってきていた。

だが、予想を反して、エレンは何事もないような素振りを見せた。

「そうか。なら私は先に家に戻るとする」

「え？ お、おい」

翻すように背中を見せるエレンに、反射的に声を掛けてしまう。彼女を呼び止めた自分の行為に驚く。

「なんだ？」

至って平然。それが、余計に不安にさせる。

「あ、いや……良かったら、エレンも一緒にどうだ？」

後ろの方で、じり、と砂を擦る音が聞こえた。

途端、エレンがこれまでにない程に冷たい視線を俺に向けた。

「馬鹿か君は」

「え？」

「彼女は君や子供達の為にお菓子を作っていたんだろう。それを部外者の私が一緒にいれば、彼女の行為を無駄にってしまうじゃないか。君も少しは空気を読め」

酷い言われようだ。

「あ、あの」

ユカがかしこまったように一步前に出てきた。

「お菓子作り過ぎちゃったんで……その、良かったらエレンさんもご一緒にどうですか？」

彼女なりの気遣いだったのだろう。けれど、彼女自身は気付いていないようだが、ぎこちない表情までは隠し切れていなかった。

「すまないが、遠慮させてもらうよ。あまり甘い物は好きじゃないから」

「そうだったんですか。じゃあ、今度は甘さ控えめのお菓子を作りますから、その時にはユウやさんと一緒にしてくださいね」

「ユウヤと一緒に、か」

「え？」

「いや、何でもない。すまないが、私はこれで失礼するよ」

そう言い残し、エレンは俺達に背を向けて去って行った。

立ち尽くす俺に、ユカがまた腕を取った。

「行きましょう、ユウヤさん」

「あ、ああ」

先程とは少し強引気味に足を進めている間、俺達に会話はなかったけど……エレン。どうしてあんな嘘なんか。

甘い物は、大好物の筈だろう。

しばらく無言で歩いていると、不意に、恐らく俺に聞こえない程度に抑えた声で、ユカがぼつりと、重く低く呟いた。

「いなくなればいいのに」

――――。――――。

「おう、ユカちゃん！ 今日彼は氏を連れてデートってか！？ 今日是一段と熱いと思ったら、お前等が昼間っから隠れて『アツアツ』してたから気温も高くなったのか！？」

真昼間から問答無用でオヤジギャクを飛ばすのは、ユカの家近所に住むオヤジさんだった。頭がツルピカなので裏では通称『電球』と呼ばれている。

オヤジさんは主に鍛冶屋の店を開いているので……お、丁度良い具合の斧がある。それでひと思いに首を刎ねてやりたいくらいだ。

「ば、馬鹿な事言わないでください！ な、何がアツアツですか！ もう！」

ユカもユカで無視すればいいものを必死にオヤジさんに対抗している。ユカはどちらかというと弄られる性格をしているので、街の人達に苛められている光景を良く見るのだ。

その度に半泣きになって俺に助けを求めてくるのだが。

「くおらユウヤ！ 若いからって調子に乗って遊び過ぎたら駄目だぞテメエ！ ユカちゃんはまだ一六なんだからな！ いきなり俺に『バイベー』出来ちゃいました、てへっ」なんて言ったらこの俺様が承知しねえぞ！」

「うるせえよ電球」

頭ラリってんのか？　と思ってしまう程の下ネタトークに、さすがの俺も少し注意するか……　と思っただ、やはり止めておく。

俺以上にもっと凄いお方が、オヤジさんの後ろで斧を持って待機しているのだ。それこそオヤジさんの奥様——裏では通称『デーモン』と呼ばれている魔の鬼神である。

「あんた——」

後ろから響かされる奥さんの声。とても旦那に向けられているとは思えない程の冷たい響き。

その時、ゲラゲラと笑っていたオヤジさんの顔が一瞬にして凍り付き、今では産まれたての子羊のようにプルプルと震え始めている。

鬼相を宿す奥さんの表情はとてもじゃないが人間業ではない。たまたま運悪く近くを通行していた親子が、奥さんを見た途端に悲鳴を上げて逃げ去って行く。

さあ、ここからだ。

ゆっくりと後ろに振り向いた——と思いきや、オヤジさんは魂を抜かれてしまったかのように突然と倒れてしまったのだ。

「お、オバサン！？　な、何をしたんですか！？」

動揺しながらもユカが訊ねる。

「別に何もしちゃいないよ。こいつが私の顔を見た途端に気絶したのさ。全く失礼な奴だよあんたは！ 自分の妻の顔を見て口から泡吹いて白目剥くなんてどういう神経してんだい！」

口から泡吹いて白目剥く程の強烈な顔でしたよ、とは口が裂けても言えない。

オバサンはオヤジさんの片足を持つと、そのままズルズルと引き摺って行こうとした。が、いきなり立ち止まり、俺の方へ向いた。

「ユウヤ君、この辺りで最近悪い奴等が出回ってるようだから、大事な人はしっかりと護らないと駄目だよ」

それはつまり、言い方を考えてみれば、俺の身近な人物を護れ、という訳であり。

「な、ななな、なななな！」

案の定、ユカが赤面する訳である。

っていうか、この夫婦揃って大馬鹿である。

「もうっ……勘違いもいい加減にしてもらいたいです」

オヤジさん達と別れて養育施設に向かっている最中なのだが、ユカはまだ少々御立腹の様子だった。

からかわれた事に相当怒っているようで、俺は気分転換のつもりでユカに話し掛けた。

「でも、オヤジさんもオバサンも結構良い歳だろ？ 成人の子がいともおかしくなさそうなのにな」

単に思った事を口にしたただだった。

オヤジさん達の子供は、ただこの街にいないだけで、どこかに旅をしているとか。又は『エデン』に住んでるのか。そのどちらなのだろうと考えていたのだが、ユカから思いもよらない返答が返ってきた。

「あの夫婦に子供いないんですよ」

ユカの声は少し重く、小さかった。

もしかすると、オバサンは子供が作れない身体なのかもしれない。だが、遠慮がちにはあるものの、俺の勝手な解釈をユカに告げると、彼女は小さく頭を横に振った。

「小さい頃に亡くなったようで、それ以来、子供は作らないそうなんです」

「それは……」

曇るユカの表情を見て、聞くべきではなかったと申し訳ないと素直に思う。これ以上の詮索は彼女を悲しませるだけだし、失礼だと思い「悪い」の一言だけで済ませた。

氣遣つてくれているのか、ユカが優しい口調で言った。

「だからなんでしょうね。あの人達が、どれ程子供を大事に思っているのか」

そう言う彼女の瞳は、真っ直ぐに俺に向けられていた。目と目が会う。彼女は頬を染め、潤んだ瞳は何かを望んでいるような、そんな目をしていた。

靡く涼しい風は、ユカの青い髪を滑らかに舞いらせる。一六歳だからといって、目の前にいる彼女は、紛れもなく、大人の魅了を開花させた女性だった。

「ユカツ！」

——二人の空間に亀裂が走るように、遠くの方から響く第三者の叫び声が意識を外へ飛散させた。

すれ違う人の肩を掠めようと構わずこちらに走って来る人物は、俺やユカと同じ養育施設で働く『レイン』だった。

レインは全速力で俺達の側まで駆け寄ると、全身から力が抜け落ちたようにその場に崩れた。

荒い呼吸と咳き込み、血の気が失せたレインの蒼白な顔色は、明らかな異常事態そのものを現している。その変貌した彼女に、ユカは慌てて大きく揺らす両肩に手を置いて訊ねた。

「そんなに慌ててどうし——」

「大変なの！」

ユカの言葉を待たず、レインは逆にユカの両肩を掴んで涙ぐみながら叫んだ。普段は温厚な彼女だが、その狂変極まりない態度はさすがに何かが起こったのだと察しが出来た。

「ミアが施設からいなくなったの！ 皆で必死に探してるんだけど見つからなくて……！」

「なんですって……！？」

動揺と不安が俺とユカを襲った。

レインが言うミアとは、まだ七歳の女の子だった筈。ミアは養育施設で生活して、まだ間もなかった筈だ。

だが、七歳の子とはいえ、行動出来る範囲など限られてくる筈だが……。

「いなくなったのはいつだ？」

俺がそう言つと、レインは震える唇をぎゅっと噛み締めた後、言葉を一語一語噛み締めるように言った。

「探し始めたのは、一時間くらい前……でも、いなくなったのは、もっと前かも」

レインは両手で震える身体を抱きしめた。

彼女の年齢を考えれば、ミアは自分の子供と言ってもおかしくないだろう。二人の出会い方は他の子供とは少しばかり特別だっただけに、他の子供と平等に接しようとしても、心のどこかではミアに対する思いやりは強い筈だ。

ミアは始め、誰にも心を開かせようとはしない、心に傷を負った少女だった。だが、レインだけは、唯一自分の心の出入りを許せれる存在だったに違いない。

レインも、そんなミアを愛おしく、まさに自分の子供のように可愛がっていたのだろう。ミアにとっても、レインは親代わりの存在の筈なのだ。

それで施設を抜け出す、という事は……。

「他に探していない場所はないのか？」

俺がそう言つと、レインは涙を流しながらも必死に思考していた。

「あ、後は、中央区くらいしか……」

「中、中央区……」

その言葉に、ユカの顔色が一瞬にして悪くなった。俺も、強張った表情は隠せなかった。

あんな場所に一人で向かったのなら、もう……という考えを、無理矢理に掻き消した。

拳を握り締める。少し汗が滲んでいる。探す場所が後そこしかない

のなら、迷っている時間が惜しい。

何も言わない沈黙を、俺は勇気を出して突き破る。

「俺が行って来るから、お前達はこの付近の搜索を続けていてくれ」
緊迫していた空気が、俺の言葉で更に熾烈な空気を生む羽目になった。

予想にもしなかった発言だったのだろう。ユカは心底驚いた顔を見せた。が、次第に何か意を決したような、だが、その瞳の奥に抱く恐怖までは隠し切れていない。

「ユウヤさんっ、わ、私も」

「駄目だ」

強い口調で彼女の言葉を制した。驚いて身体を硬直させてしまった事に申し訳なく思おも『あんな場所』にユカを……力もなさそうな女性を連れて行く訳にはいかない。

それに、この子はまだ『子供』だ。

こんな事になると知っていたのなら、すぐにでもエレンの手を借りたいところだが、状況から見て、彼女を呼ぶ時間もなさそうだ。

「いいな。お前達は中央区以外を搜索しろ」

まだ何か言いたげそうなユカを放って、俺は二人を置いて養育施設とは反対方向に足を向けた。

——『中央区』——

ファーシル街の中心部。最も立ち行つてはならない場所。

禁止区域として指定された禁断の領域に、俺は覚悟を決めて踏み込もうとしていた。

中央区

かつては繁栄の盛んだったファールシル街の中央区は、今ではその大半が酒や娼婦を扱う店が多く並んでいる治安の悪い区域と化しているのが現状だ。

ユウヤ達が住む区域とは程遠い場所にあるといっても、夜になれば中央区で泥酔した輩や盗みを働こうとする悪党が絶えず、街の警備隊も苦勞を要する厄介な場所だった。

昼間だというのに大半の酒場には大勢の客の姿が見え、中にはファールシル街の人間もいれば、他の街や別の地区からきた輩も少なくはない。

客同士が騒動や乱闘を起こすのも珍しくはない悪徳の棲みかである中央区以外の住民が、近寄ろうなどと恐れ多い。

街の市民が足を踏み入れたと気付かれれば、身ぐるみを剥ぎ取られ、それが女ならば子供であろうと容赦なく蹂躪されてしまう事も珍しくない異境の地。

弱肉強食の時代に、弱者は日々怯えて過ごす以外に生き延びる術を知らぬ理不尽極まりない世の中。

そんな世の中の真つ最中に、中央区の人間でもなければ、行き浸りの『臭い』すら感じさせない一人のファールシル街の住民が、一つの酒場の入り口の前で立ち止まった。

店内から聞こえる客の笑い声に、その者は一度、舌打ちを鳴らす。

服や髪にこの街の悪臭が染み込むと考えただけでおぞましい。

今日はいつにも増して客が多いらしく、特に今日は余計に苛立ちが込み上がっているので尚更機嫌が最悪ときている。

只でさえゴロツキが棲み付いている中央区に、一步踏み入れれば怪我一つでは済まされない事を、この者は重々と承知の上で、堂々と酒場の扉を開いた。

何の躊躇いもなく店の中へと入って行くその様は、自殺行為と見受けられても何の不思議も感じない。

店内は男達の盛大な笑い声で支配されていた。酒を浴び、彼等の手元にはそれぞれ『獲物』を所持している。

図体のデカイ男や全身に刺青を入れている者達は、来店者の存在に気付き、すぐに入口の方に目を向けていた。

笑い声が、まるで最初からなかったかのように静かになっていた。

言わばこの場の人間は、色々と『訳アリ』な者達ばかりが集まる、男達の聖域。

そんな男達が居座る場所に、女がやってくるとは思ってもみなかった事だろう。更に言えば、来客した女は、まさに絶世の美女と呼ぶに相応しい容姿をしていた。

腰まである紅い髪が何よりも印象的で、その細い腕と余計な脂肪も弛みもない抜群のスタイルは、酒場にいる全ての男達の目を一瞬にして虜にしてしまう程の美貌を持ち合わせていた。

そんな男達の姿に目も暮れず、禁断の領域に堂々と足を踏み込んだ女性——エレンは、そのままカウンターまで足を運び、椅子に腰を下ろす。

カウンターの奥で酒のボトルを開ける男は、この店のオーナーだ。名をバリー・バルソン。普段、客からはオーナーと呼ばれているが、本名を知っているのはこの街でエレン以外に誰もいない。

エレンは一度、周囲を見渡した。男達は怪訝そうに、珍しそうに彼女の全身を舐め回すように欲望を剥き出した、ねっとりとした視線で見つめている。

彼女がわざわざ危険を冒してまでここにきた理由——ただ酒を飲みに来た訳ではない。

「なんだ姉ちゃん。そんな娼婦みたいな格好で狼の住処にやってきたのはどんな理由だ？ まさか、そのエロい身体で俺達を愉しませてくれるってのか？」

声を発したのは、短い金髪で耳に大量のピアスを付けている三〇代前半の男だった。

ゲラゲラと下劣な笑いが店内に響いた。男の下品な台詞に、又は女というだけで周囲の男達はエレンを見下しているように思えた。

馬鹿にした言葉遣いに——特に身に付けている服を、あろう事か『娼婦みたいな衣装』呼ばわりした侮辱に、背を向けたままの彼女は煮え滾る怒りを握り締める拳と見開く両目で堪えていた。

そこに、冷静になるようにと言わんばかりの物言いをする、同じカウンターに腰を下ろす一人の男の声があった。

「無茶は止めておけ。あんなのに構って痛い目に遭うのは自分達だ」

エレンは視線をその男に移した。弱々しい程に痩せた身体をした老人はフォークとナイフを持って昼食を取っている最中のようなだ。

「ここにいる連中は全員最悪な奴等ばかりだが、腕は確かだ。見てみな」

そういう老人の視線は男達の足元に向けられていた。エレンもつられて男達の足元の方へ目をやる。

剣や斧。銃や拳銃。又は機関銃までもが床に置かれていた。その武器全てが、彼等の商売道具という訳なのだろう。

カウンターのテーブルに食器の置かれる音に、エレンは視線を前に戻した。目の前に水の入ったグラスが置かれている事に、彼女はバリーに視線を送って確認を促せる。

バリーは相変わらずグラスを布で丁寧拭いている——その時、彼の視線がエレンの瞳を射抜いた。

？なるほど。今回の依頼は——？

「へえ、手入れしてない汚い髪だと思ったが、艶があるじゃん」

髪を撫でられる感触が全身の毛を逆立て、鳥肌を総出させる。

ユウヤにも触れられた事もなく、いつも綺麗だ、と褒めてくれる自慢の髪を、他人の男の汚物のような手の感触に思考よりも先に感情が爆ぜた。

謝罪も懺悔も赦しを請う時間など与えず、エレンの拳は男の顔を爆散させる程の威力を持って一撃を繰り出す。

――が、バリーに振り被った左腕を掴まれた事により、その反動でカウンターに置かれたグラスが床に落ち、粉々に割れてしまう。

憎悪の炎を宿す双眸を持って、エレンはバリーを睨み付ける。しかし、何の感情も思考も見透かせない男の顔に、逆に沸騰する激情を冷やす事が出来ていた。

「威勢の良い女だなオイ。そんなに俺に興味があるのか？　ならここで股開いて誘ってみるんだな！」

まるで陳腐な物を嘲笑うように、耳障りな笑い声が一層高く店内を響かせる。

そろそろ黙らせる必要がある。その思考が脳裏に過つたら、もはや彼女を止められる者などいない。

自分の席に着く男を見届けた後、エレンはバリーの手を振り払うと、先程の老人に話し掛けた。

「すまない、これ借りるぞ」

「え？」

エレンが手に取ったのは男が使っていたフォークだった。

フォークといえ、その鋭利な部分は人を殺すには充分の威力を持っている。彼女の行動に男達の笑いが硬直する。男達が嗅ぎ慣れた殺しの臭いがエレンから放たれているのを察した。

「ああ？ 何する気だ？」

エレンに侮辱の限りを尽くした男は、狙いが自分自身だと理解しているだけに、その狂笑が止められない様子だった。

「今からこれで指と指の隙間に刺す。それも全力でだ。成功すればこれ以上私に口を聞くな」

「はあ？ んなもん簡単じゃねえか」

「ふむ、そうだな……。なら、目を布か何かで隠した状態でやるのはどうだ？」

その瞬間、男達は互いを見つめ合った。本気かよ？ と呟く者までいる。

だが、男等は次第に不気味な笑みを浮かべ始めた。

「いいぜ。じゃあ、失敗した時はどうするんだ？」

「貴様等の言う事を聞いてやろう。なんでもな」

大胆な宣言。刹那、男達は次第に舌舐めずるような不気味な笑みへと変わりつつあった。

男達の視線が、エレンの身体に纏わりつく。この街以外でも多くの娼婦や何の罪もない女性を犯してきた男達も、エレン程のスタイルを持つ女性はそういない。

更に、殺しの依頼続きで性的欲求が解消出来ずにいる男達に、エレンの言葉はどん褒美よりも甘い汁を漂わせている。

久し振りの御馳走に有り付けたように、男達の欲求は最大限までに膨れ上がっていた。

「ま、待ちなさい。いくらなんでも……」

この状況に不安を隠せない老人は動揺しながらもエレンの身の心配をしていていた。だが、彼女は老人の気遣いも触れようとしなかった。

バリーが渋々渡す黒い布を顔に巻いた。準備は整った。

さっさと終わらせよう。エレンはフォークを強く握り締めた。

「自分で言った責任——ちゃんと取れよな」

「分かっているよ。あと、無暗に動くなよ」

「は？ なに言って——」

稲妻のような鋭い閃光が、それ以上の言葉を発する事を赦さぬと言わんばかりに斬り棄てる。

——それは、予想を反した出来事だった。

その光景に、誰もが意表を突かれたような表情を、いや、それよりも何が起こった？

金髪男のテーブルの上——もっと詳しく言えば、男の右手の中指と人差し指の間にフォークは根元まで深々と突き刺さっている。

分厚いテーブルを簡単に貫通したフォークの先は、あと数センチのところまで危うく男の股間を貫く寸前だった。

沈黙が流れる。誰もが息を呑みつつ、全身が震撼する感覚に打ちのめられている。

布を解いたエレンの手には、先程まで持っていた箸のフォークはない。

つまり、彼女が持っていたフォークは、紛れもなく、男のテーブルに突き刺さっているそれに間違いはない。

後方から溜め息が聞こえた。「やり過ぎだ」と言いたいのだろう。バリーの呆れ顔がエレンの脳裏に浮かぶ。

彼女と男の間隔は五メートル弱。その間には、他の客達もいるのだ。

万が一、彼女の投げたフォークが他の客に刺さっていたのかもしれない。なかったのだ。その上、視界を塞がれている状態で……と考えると、あまりにも危険な賭けをしていたのだと、男達は顔を蒼白して肝を冷やしていた。

何か液体が床を這っている。臭いからして酒類ではない。男は大人であるにも関わらず失禁したのだ。

「お前、臭いな」

はっ、と男がその声に顔を見上げた先に、エレンの冷酷極まりない表情が映り込んだ。

この女が自分に何をしたのか言うまでもない。危うく男の大事な部分を失いかけた怒りを見せると思いきや、テーブルを貫いたフォークをまじまじと見つめていると、殺意より恐怖の方が勝っていると男は自覚した。

この店に座る男達全員の頭であるこの男には、威厳もある。

失禁し、罵られ、これだけ侮辱されては、部下達の信頼が消えてしまふ恐れもある。

この男が血の滲むような努力をして掴み取った地位すら、得体の知れない女に悪戯程度の遊戯が、まさか自分の生涯において、最も恥じるべき失態を犯させる事になるうとは思ひもしなかっただろう。

失禁した男に、エレンは怪訝な表情を見せながらすぐに数歩下がった。

「この街から消え失せろ、下衆野郎」

その言葉がこの男には相応しい。もう用がないと言わんばかりな態度で、エレンは酒場から出て行った。

膨れ上がる苛立ちのあまりに、一層この店ごと潰してやろうかと脳裏を過る。もし今が夜だったのならば、この店にいた客全員に対し、この腸が煮え滾る衝動をぶつけてやったものを。

いや、既に今回の依頼内容は承諾済みだ。後は長い夜まで待ち、じっくり時間を掛けてこの怒りを容赦なく撒き散らしてやろう。

未だ治まらない怒りを抱えながら、早くこの腐敗した場所から一秒でも早く去ろうと足を一步踏み出したその時、彼女の心臓が大きく跳ね上がる。

何故——？ という疑問が脳裏を、この現実が、今この瞬間だけは嘘であってほしいと懇願する。

中央区には何があっても来るな、とうるさいくらいに言っておいた筈なのだ。

危険であるが故に、力のない人間……つまり武術や己の身を護る術を持たないファールシル街の一般市民達が狙われる危険性は極めて高いからだ、あれほど言っておいたのに。

「どうして、ここに……」

喉が渴いて上手く言えない。彼の視線が自分に向けられている。自分がこの辺りを出入りしているなど、知られなくなかった。

「エレン……何故君がここに？ 家にいるって言ってたんじゃない——」

ユウヤの疑いの眼差しに、エレンは胸をナイフで刺されたような痛みを覚え、同時に失望されてしまうという恐怖が全身を駆け巡る。

何も言えない。何も思考出来ない。

ただ、己の心臓の鼓動が、うるさいくらいに鳴り響いていた。

中央区 2

不気味な場所というより、醜悪に汚染された空気と、街を汚すゴミや廃棄物が敷き詰められたこの場所に、本当に人が住んでいるのかと疑問に思わざるをえない。

まだ昼過ぎだというのに薄暗く感じさせる中央区。

その汚れた街が原因で一般市民が足を踏み入れないという理由も理解出来るが、視界に映るだけの建物の各階の窓から送られる、邪険に扱うような鋭い視線が俺を取り囲んでいる。

外部からの人間を怪訝に見つめる人間の視線が、全身を貫かんばかりに突き刺さる。

恐らくファールシル街の人間が何よりも恐れているのは、この異質だと感じてしまう程の、拒絶だ。

ここの住民は確かにいるというのに、正気を感じられない、といった方がいいだろう。

中央区に足を踏み入れてからアルコールと弾薬と腐敗した臭いが空気を汚染し、鼻を突くなんとも言えぬ強い刺激臭が顔を強張らせる。ゴミは酷く散乱し、視界が悪いのは空気が淀んでいるからだだろう。

道路の端で多数の人間が地面に寝転がっている。その大半が酒を煽る者や寝ている者達なのだが、最も目に付いたのは手元にある凶器だった。

剣やナイフを持つ者もいれば、あまり見た事がなかった拳銃まで所持している奴等もいる。

対して俺は武器の一つも所持しておらず、咄嗟に武器になる物といえば、割れた瓶くらいしかない。

走っている俺を何事かと険しい目付きで睨む男達。いつ襲われてもおかしくないこの上場に嫌な汗が額に滲み、危険だと神経が警報を鳴らす。

「これは……ちょっと不味いか」

せめてナイフくらい持って行けば良かった。

なにより、ミアは本当に中央区にいるのだろうか。こんな、不気味で狂気に支配された、この『異常』な区域に――。

俺でさえ、中央区に向かう事に躊躇ったんだ。それを、七歳の少女が、何の恐怖も持たずに踏み込めるだろうか？

いや、このような事をグダグダと述べている場合じゃない。探せれる場所は、例えどんな場所でも探さなくては。

もし、誰かがミアを見つけたら……？ そいつが、心優しい善人ではなかったら……？

そう考えただけで、鳥肌が立つ程の悪寒と、誰かも知らない相手に激怒の感情が煮え滾る。

男は何をするか、何を考えているのか分からない生き物。例え七歳

の少女相手でも奴等は容赦なく牙を剥く。

ミアを発見した時、既に『手遅れ』だったら——俺は……。

そう考えただけで、疾走する速度が更に上昇する。冷静になれと考える。まだ手遅れと決まった訳ではないのだ、と胸の奥底から湧き上がる憎悪を無理矢理に抑えた。

「……この街に、こんな場所があつたなんて」

『中央区には絶対行くな』とエレンは厳しく言っていたのか、ようやく理解出来た。

けれど、どうして彼女は、中央区が危険な場所だと知っているのだろう。その言い方だと、まるでこの場所に一度、足を運んだような言い癖だ。更に中央区は、売春婦を経営する店があるらしい。

「まさか……」

己の思考を掻き消した。馬鹿な考えは彼女自身への侮辱に繋がるからだ。

エレンともあろう人がこのような危険極まりない場所をうつろつものか。まして女性の身。こんな男達の巢の中に踏み込んでしまったのなら、もう二度とここから逃れられないのは目に見えている。

ただ走ってばかりでは無謀過ぎる。砂漠に落とした石を見つけるよなものだ。

真面目な返答をしてくれるかどうか分からないが、ここは誰かに尋

ねるしか他ないだろう。

ふと視界に、細身の男が目映った。背後しか見えていないので顔は分からないが、三人の若者達が道の真ん中で会話をしている様子だった。

迷ってられない。俺はすぐ彼等に駆け寄り、声を掛けた。

「すみません、少しいいですか？」

「あ？ 誰だ？」

威圧するような厳しい口調に、思わず気押されそうになる。

「ちょっと聞きたい事がありまし——」

振り向いた彼の顔を確認した時、俺はこの状況を整理するのに暫しの沈黙を要した。

俺の顔を見たそいつは、驚愕のあまりに目と顎を限界まで広げていた。まるで死んだ人間が目の前に現れたと思わせられるような……つまり、どうしようなく情けない表情になっているという事だ。

ジノ・カーリス——短い茶髪、そばかすが特徴で、俺より頭一つ分背が低い青年は、口をパクパクさせて俺を凝視していた。

「——お前、こんな所で何をしている」

「えっ、いや、あっ、あのっ……」

狼狽しながらも必死に言い訳を考えているように見えた。

その時、茶色の布で巻かれた筒状の物がジノの手にある事を、俺は目を細めてそれを見つめる。布で隠しているのは、誰かに見られては不味い物だからなのだろう。彼の手にある物が何なのか、俺は少なからず理解出来た。

「煙草か」

恐らく、店で売っている煙草とは比較にならない程の中毒性を秘めている代物だろう。

他の二人も俺の登場に警戒心を働かせている。どう見ても俺やジノより年が下に見えるのだが、彼等は一体何歳なのだろうか。

ギロリ、とジノを睨みつける。鋭い眼光で射抜いてやると、ジノは身体を硬直させた。いつもの如くというか、なんともまあ世話の掛かる奴だ。

俺は一呼吸置いてから、お説教モードのスイッチを入れる。

「はい、ジノ君。何故君がここにいいのか、そしてその手にある物は何なのかを簡潔に三秒以内に答えなさい」

「んな無茶な!？」

「いち」

と、同時に俺の鉄拳がジノの顔面にクリティカルにヒットするのだ。ジノはヤラレ役よろしく「ぶげはあああ!」と叫びながらそ

のまま後ろへ吹き飛んで行った。

他の二人もこの状況に空気を讀んだのかは定かではないが、吹き飛ばすジノに向けて「兄貴いいい！」と叫んだ。

「ひ、卑怯にも程がありますよ！ 三秒って言ったのに一秒で殴るってどういう神経っすか!？」

地面に叩き付けられたジノは即座に身体を起こし、引き腰で俺から後ずさる。

後退するジノをじりじりと追う。

「じゃあお前、三秒で言い訳出来るの？」

「いや無理ッス」

迷いのない率直で素直な返答が逆に清々しく思える。

「なら、どのみち殴られてたんだから良いじゃねえか」

「三秒あったらアンタのパンチ避けれたかもしれないかったですよ！」

「……ほう」

その言葉が仇となってしまったという事を、彼は如何にも『しまった』という顔を見せた。逆に俺は、心底驚いた表情を見せつける。ついでに眉間にしわを寄せてこめかみ辺りに青筋も入れておく。

「これは良い事聞いた。三秒あれば俺の拳を見切れると？　へえー
凄い自信だなあオイ」

拳をバッキバキに鳴らす。もうそれだけでジノの目と鼻から透明な
汁がダダ漏れの状態で今にも失神しそうな感じなのである。

だがこれ以上やると、今度は下の方が漏れてきそうなので、懲らし
めるのはこれくらいに済ましておく。

幸いな事に、ここでジノと会えたのは運が良い。

「ジノ、頼みがある」

真面目な顔付きでジノに近づいたが、彼はまだ俺が怒っているのだ
と思い込んでいる様子だった。

けれど、それも数秒。先程まで震え怯えていた彼は暫く呆けた顔に
なっていたが、俺の態度に何か深刻な状況にあると察してくれたよ
うだ。

「ユウヤさんがここに来るって事は、何があっただんですか？」

話が早い。

「養育施設にいた七歳の女の子が行方不明になった。お前、この辺
りで女の子見なかったか？」

「七歳の、子っすか？」

ジノは一度、二人の青年に目を向けた。二人は互いに目を合わせた

が「いえ」と答えるだけだった。

「そうか……」

手掛かりがない状態だと、行き詰めになるのは時間の問題だ。

「その子、名前なんて言うんですか？」

「ミアって子だ。二週間程前に施設に入った子だよ」

ジノは養育施設の人間ではないが、俺のように彼を知っている従業員は多い。たまに施設に遊びに来る事もあるのだ。その度に施設の子供達に弄ばれているのだが。

「その子、ここに来てるってどうして分かったんです？」

「レインの話だと、他は概ね探し回ったそうだ。考えられそうにはないんだが、探せれる場所は中央区しかないそうだ」

「一人で来たんっすか？ また身の程知らず——いえいえ冗談です！」

拳を見せてやると急に態度を変えやがる。

「……もしかしたら、何か情報が入ってるかもしれないね」

「入ってるって、どういう意味だ？」

「ここらにいる連中は情報網がとてつもなく広いですよ。だから奴等が集まるこの辺りの酒場なんかに行ったら、何か手掛かりが見

つかるかもしれません」

なるほど。情報収集にはうってつけってところか。

「それを聞いて安心したよ」

俺はジノの腕をがっしりと掴んだ。

「え、なんすか？」

あからさまに拒否反応の見えるジノ。

「その酒場に連れて行ってくれ」

「無理ッス！」

思いつきり目を見開いて否定しやがったぞこいつ！？

「おい！ 話し聞いてなかったのか！？ 一刻を争うんだって！」

「だとしても無理ッス！ 無理ッス無理ッス無理ッス！！！」

首が千切れるんじゃないかってくらいにブンブンと頭を横に振りまくっている。あまりの必死さに、逆に俺が気圧されてしまっていた。

「ユウヤさんは知らないでしょうけどね、ここは、とてもじゃないですけど危険過ぎるんですよ！」

「え、でも、お前はいつも来てるんだろ？」

「俺は多少コネがあるからまだ大丈夫なんです！ でもユウヤさんはここ『初めて』の人でしょ！？ っていうか、ここまで来れただけでも凄いのと思うんですけど！？」

全速力で走ってきたのが幸いしたらしい。ここの連中も一々追い掛けてくるような面倒臭い事はしないのだろう。

俺は、懇願の思いでジノに頼んだ。もはや、お前しか頼める奴はいない……そういう想いを込めて。

「ジノ……頼むよ」

「骨が軋む程思いつきり握り締めないでくれます？ ってかもうそれ脅迫じゃん」

「一生の頼みだ」

「それ、七回目ですよ」

「本当に頼む。俺達長い付き合いだろ？」「アンタここに来てまだ三ヶ月程でしょ。ってか、アンタと初めて会ったのも一ヶ月前だし」

確かにその通りだ。ジノと知り合ったのは一ヶ月程前。まさに衝撃的な出会い方だった。

簡単に言うなら、こいつは仲間三人引き連れて俺をカツアゲしようとしたのだ。

ナイフを顔に突き付けたり、馬鹿にした物言いをしたり、服に唾を吐いたりで、どこぞのチンピラ以上に達が悪い奴等だった。

常に温厚で誰にも優しく好かれる性格を持つ『平和の象徴』とまで呼ばれたこの俺でさえ、天を仰いで「殺しちゃってもいいっすよね？」と、問うのだった。

流石の神様も「いいぜ、殺っちまいな」と了承してしまう程のクソム力つく野郎だったのだ、こいつは。

その結果、今はこのように主従関係にある。

短い付き合いであっても、ここまで一向に折れないジノは見た事がない。仕方なく、掴んでいた手を離れた。あっさり手を離してくれたのが意外だったのか、ジノは掴まれていた自分の腕と俺を交互に見つめていた。

「じゃあ、場所だけでも教えてくれ。それだけでいいから」

「ちょ……本気っすか」

冗談でも笑えないと言わんばかりに頬が引き攣っていた。だが、俺は至って真面目に答えているつもりだ。

「ジノ、子供の命が掛かってるんだ。こうしてる間にも、その子は危険な目に遭うかもしれないんだ」ジノも不良の箸くれとはいえ、そこまで怯える程の恐ろしい所なのだろう。

俺は改めて中央区がどういうところなのか教えられたような気がした。

しかし、だからといって無駄な時間を費やしてる場合じゃない。

引き下がらない俺を見つめるジノは、少し間を置いた後に、いかにも疲れたと言わんばかりに大きく溜め息を吐いた。

「分かりましたよ。連れて行けばいいんですよ」

「本当かつ？」

「ただし、揉め事に巻き込まれるのは御免っすからね」

場所を覚えてくれるだけでも本当に有り難い。俺は一度頷いてからジノに聞いた。

「で、その酒場ってどこなんだ？」

「ここ」

指差す向かいにある建物は、距離にしておよそ三メートル。

「礼はいらねえっすよ」

教えてやったぜ？ と偉そうな態度を示してくるクソ野郎に、俺は迷わず再び正義の鉄槌を食らわすのだった。

「恩に着るぜコノヤロー。かなりのロスタイムだったぞ」

小さな友情が芽生えたと思ったらコレだ。

数メートル離れた所でピクリともしないジノを放っておいて、その店に一步近づこうとしたその時――、

この醜惡に濁った瘴気を浄化する為に現れたような女神だった。酒場の扉を開いたその瞬間から、女神を取り巻いていた淀んだ空気の透明度が増す。

それはこの中央区を蝕む悪臭や汚れ、人間の狂気と混沌の果てに産まれた『色』そのものが、一切の干渉を赦されない女神という存在に一線を置いているとしか思えない程の絶世の宝。

俺は、夢でも見ているのかと錯覚してしまっていた。酒場から現れた、一人の女性――。

その美しく輝く紅い髪を、真紅の瞳を、何者にも触れる事の赦されない圧倒的存在感を持つ女性を、俺は一人しか知らない。

だから『見間違え』という自分に対しての言い訳など、出来る筈がなかった。

だが……何故彼女がここにいる……？

中央区には決して近付くな、と口うるさく一番に言っていた彼女が、どうしてこの異常区域に？

薄汚い街の光景も、うるさい騒ぎ音も、このアルコールの刺激臭も、全てが遮断される。俺の五感全てが、今は彼女だけに集中していた。

誰にも寄せ付けない雰囲気を漂わせていた彼女は、俺を見た途端、その態度を一変させる。

最初は驚き――だが次第に、その表情に怯えが混ざり始めていた。

自分でも理解出来ない……得体の知れない感情が胸の奥を抉った。

「どうして、ここに……」

その言葉は震えていた。拒絶を含めた口調だった。

胸にズキリと痛みが走る。俺を見る彼女の顔を見るのが、痛くて仕方なかった。

だが、聞かざるをえなかった。

「エレン……何故君がここに？ 家にいるって言ってたんじゃない？」

乾いた声は、思っていたよりも大きく出せなかった。それでも、エレンの耳にはしっかりと届いている、筈なのだ。

「……」

それでも、彼女は黙を通している。どう返答すればいいのか考えているのか……又は言う必要がないと思っているのか。

「ここが、どういう所なのか……君が一番知っているから、俺に近付くなって言ってたんだよね？」

彼女の眉が、ピクリと反応した。初めて、居心地を悪くしたエレンの姿に、胸に刺さる棘が更に奥深くへと食い込んでいく。

エレンは視線を俺から外し、自分の腕をぎゅっ、と握り締めていた。動揺を隠し切れていない証拠だった。

重苦しい沈黙を破るように、遙か遠くの方で、少女のものとと思われる悲鳴が響いた。

触れれば破裂してしまいそうな程のか弱い声帯を持つ人間が、この中央区で健在出来る筈がない。なら、この声の持ち主は、この場の恐怖を理解出来ぬ思考を持っているという事になる。

最初にその声に反応を見せたのはエレンだったが、行動は俺の方が速かった。

「エレンッ！」

この場の全員の意表を突いた事だろう。彼女の名を叫ぶと同時に、俺は全員を無視するかのように声がした方向へ向けて地面を蹴っていた。

文字通りの全速力だ。目線は前方に向けたまま、置き去りにしたエレンに向けて再度言い放つ。

「エレン！ 頼みがある！ 力を貸してくれ！」

悲鳴の大きさから、それ程距離は離れていない筈だ。だが、蜘蛛の糸のように細い通路が存在している中央区。

直線で三〇メートル離れた場所へ辿り着くのは訳が違う。一本の道を間違えたら、それこそ一分以内で到着出来るところを一時間以上も掛かってしまう恐れがある。

「さっきの悲鳴と何か関係あるのか？」

気付けば俺の右隣にエレンの姿があった。エレンの瞳の色が大きく変わり、大きく見開いたかと思うと、まるで敵を見出したかのように鋭い表情になった。

走り難いロングスカートを着ているというのに、全速力で走る俺より速いという事実には、驚いている暇などない。

「施設の子供がこの付近に迷い込んだみたいなんだ！」

彼女の表情が見る見る内に険しくなっていた。どうして子供がこのような所に迷い込んだのかと疑問に思っているのだろう。

「あの悲鳴はその子のものなのか？」

悲鳴というよりは、誰かの名前を叫んだように聞こえた気がした。

「分からない。だが、可能性としては十分に高いっ」

「——分かった」

次の瞬間、俺の視界からエレンの姿が消えた。思わず足を止める。

いなくなってしまった——？ と呆気に取られて周囲を見渡してみると、エレンは俺の後ろで突っ立っていた。

「何かあったのかっ？」

緊迫感と焦りに支配された俺とは反対に、エレンは落ち着いた素振りを見せ、冷静に言った。

「何の手掛かりも無しに見て探し回っていたらキリがないぞ」

「だからってこうして立ち止まれるか！」

「まあ、待て。少しでいいから、私に時間をくれ」

「何を言って——こうしてる間にも手遅れにっ」

「いいから、黙っている」

俺の言葉を遮り、エレンはそつと瞼を閉じた。

目を閉じてから、三秒弱——エレンはゆっくりと目を開けた。

紅蓮の瞳は、虚空を一点に見つめていた。

だが、彼女の口から発せられた言葉に、俺は己の耳を疑うしかなかった。

「見つけた」

中央区 3

親に捨てられた子犬に、弱肉強食という時代の中で生きる術はない。まして、狩りの仕方や人間や凶暴な動物から身を守る術もないのだ。

それは人間にも言える。親に捨てられた子供に出来る事と言えば、ただ、己の身の安全を確保出来る場所へ避難する以外ない。

雨が降れば屋根のある場所へ。人混みの多い所が苦手なら、どこか人気のない薄暗い場所へ。残飯が捨ててあれば、生きる為にそれを口に運ぶ。

それは、人間の生存本能の働きによるものだが、別の解釈をすれば、耐え難い恐怖や屈辱を実感しなくてはならないという事だ。

そこが何処なのか何も分からない。世間がどういうものなのか知らない。親の温もりしか知らない、穢れを知らない純白な子供にとつて『初めて知る現実』なのだ。

人の心に潜む汚い悪や、情の冷たさを知るだろう。生きる厳しさを思い知らされるだろう。自分が今まで、どれ程幸福な生活を送っていたのか。自分の知る『現実』と世間の真実の矛盾に葛藤する事だろう。

大切な物が自分の手から消えて無くなるのは、あまりにも残酷な仕打ちだ。心に、二度と治る事のない傷跡が刻まれる事になる……。

最も信頼していて、最も愛する者に裏切られるという絶望。言わば、生きる希望を失った、ただの人形と化すのだ。

ミア・クレファンスという少女も、僅か七歳にして心に深い傷を負った一人。

中央区には無数の細い通路が存在している。それは蜘蛛の糸のように張り廻られた複雑な中央区の経路は、さながら電気知識の類を一切持ち合わせていない人間が、回路図の解説を余儀なくされる程のものである。

中央区の人間は他とは一別して脅威で残忍な生物である。子供だろ
うと犯し尽くした拳句に殺害するという非道極まりない行為が、こ
こ中央区では『殺される側に非がある』『弱者は強者に従うしかな
い』という掟めいたものが存在しているのだ。

そんな命を投げ捨てるような異質の場に、一人の少女——ミア・ク
レファンスの姿があった。幸い、人気のない細い通路であるのだが、
最悪な点もある事を、この少女は気にも留めていない。

鼻を刺す強い臭いにも、少女は動じない。多少アルコールの臭いに
気分を害しているのだが、まだ立っていられない程ではなかった。
薄暗い場所であっても、この少女は怯え一つ見せなかった。

ファールシル街の子供は、中央区には何があっても近付くな、と親に
教え込まれている。無論、ミアもそう教えられていた。

だが、少女は知った上で禁断の領域に足を踏み込んでいる。何故か
と聞かれれば、それは実に子供らしい理由があつたからだ。

足を止める。目の前には、高さ三メートル以上もある壁が道を塞い
でいた。そこで行き止まりなのだが、ミアの目的は既に達成されて

いるのだ。

少女の足元には、五匹の動物の姿があった。親犬が一匹、残りの四匹は子犬達だ。あまり毛が生えていない事から、産まれてまだ日は浅い。

あれは日の晴れた昼下がりであった。養育施設の裏庭で偶然見つけた親犬が、畑を荒らしているのを発見してしまったのだ。

親犬もミアの存在に気付き、急いで逃げ出そうとしたのだが、後ろ脚を怪我しており、ともに走れないだけでなく、衰弱した身体では、七歳の子供の足でも追い付けられる程のものだった。気付けばミアは親犬を追い掛けていた。そして辿り着いた場所には、警戒を見せる親犬と、その背後で小さく動く子犬達の姿があったのだ。

それからというもの、ミアはレインや他の子供達の目を盗んでは、こうして食糧を親犬の所へ運んでいたのだ。ミアが中央区の人間に今まで発見されなかったのは、人間に敵意を見せていた親犬が、我が子を護り抜く為に安全かつ誰にも発見される事のない極秘ルートを導き出したお陰だろう。

しかし、中央区に足を運んで今まで誰にも見つからなかったという事実は、奇跡としか言い様がない。

新しい命達は、親犬に寄り添う。子供達はお腹を空かせ、母親の母乳を欲している。傍から見れば、なんとも微笑ましい光景だ。

けれど、子供達は死に瀕している。親から母乳が出ないのだ。

その理由は二つある。一つは、食事に有り付けず衰弱している事。

そしてもう一つは、人間の虐待によるものだ。

親は子供達の為に栄養を採らなければならない。だが、この街に他の動物は見当たらぬ。逆に言えば、この親が、この街に棲み付いている事が不思議なのだ。

食糧となる小動物がいなければ、他を当たるしかない。人間の食べ物を狙うしかなくなってくるのだ。

ミアは知らない。この動物が衰弱している原因が、食事を取っていないだけではない事を。

だから彼女は、この動物に食糧を与えようと、レインの言い付けを破ってまで来たのだ。

母親を失う気持ちを誰よりも知る彼女だからこそ、新しく産まれてきた子供達を見捨てられなかったのだ。

「いっぱい食べて、早く元気になってね」

そっと、食材を母親の前に置く。空腹を満たせば元気になると、ミアはそう信じ切っていた。

元気になった姿で自分と共に街中を駆け回る光景を浮かべながら、少女は母親の乳を吸う子供達に目を向ける。

「もう少ししたら、お母さん元気になるからねー」

何一つ曇りのない、微笑みを浮かべながら、そう言うのだった。

——異変に気付いたのは、自分の視界が別の影により遮られたからだった。

不審に思っ て振り向けば、目の前に自分の二倍以上の身長がありそう な、図体のでかい男が二人いた。

その『異質感』はミアですら疑問を過らせた。男達から放たれる悪質な雰囲気を感じた彼女の神経は一斉に警鐘を鳴らす。この街の人間でない事は、見た目で判断出来た。

「旨そうな食いもん持つてるな、お嬢ちゃん……」

舌舐めずる音がした。二人の男は地面に置かれた食材とミアを交互に見つめる。男達はハムやソーセージだけではなく、ミアすら『獲物』と認識していた。

「な……なん、ですか……？」

震える声で懸命に問う。握り締める両手が異常なまでに震えている。どうして彼等がここを知っているのか。どうしてここにやって来たのか。そんな疑問は、恐怖によって瞬く間に消え去られる。鋭い眼光がミアの目を射抜く。

恐怖のあまり、思わず後ずさりしようとした時、ふと、自分の後ろにいる犬達の姿が脳裏に浮かんだ。

この子達を護れるのは、この場で自分しかない……その考え脳裏に過ると、後退しようとしていた足が自然と止まった。

だが、その強がりがいっつまで持つか分からない。

身体が強張って仕方ないのだ。得体の知れない不気味な視線はミアを畏縮させていた。足が震える。背筋に悪寒が走る。目に見えない恐怖は、今まさにそこにあるのだ。

不敵な笑みを浮かべる一人の男は、焦らすように一步一步確実にミアに近付いていく。

彼等は、金もなければ帰る家もない連中だ。なら、金は誰かから奪い、家に住む人間を殺せば、そこは彼等の『家』となる。そういう悪行を平然と行う奴等を、世間では『賊』と呼ばれる連中だ。

「何もしねえよ嬢ちゃん。ただ、そこにある食いもんを俺達にukれないか？」

「え……？」

足元にある食材に目を向ける。男達も腹を空かせている状態だったが、この食材は弱っているこの子達の為に与えた物だ。

男の顔を見つめた。濁り切った鋭い眼光は、引き攣った悲鳴を上げてしまいそうになる。それでも、ミアは勇気を振り絞って口を開いた。

「こ、これは、この子たちの、ごはんで……」

「それは人間様の食いもんだぜ。動物には動物の食いもんがあるんだ。俺等人間の食いもんなんか食わせたら、そいつ等死んじゃうぞ？」

あからさまな嘘だった。さすがにミアは騙されなかった。

男は反応が薄いミアに苛立たせながらも、少女から視線を外し、犬達の方へ向けられた。

ミアは気付いていないが、一瞬だったが、男は眉間にしわを寄せていた。

「で、でも……食べさせないと、この子たち死んじゃ——」

「いや、どのみち助からねえだろ」

男の言っている意味を、少女は理解出来ない。だが、次の瞬間、男の口から衝撃と残酷な言葉が放たれる。

「ガキはともかく、親はもう死んでる」

なに訳の分からない事を、言っているのだろうか——？ 思考とは裏腹に、ミアの首は、まるで機械人形のように勝手に回し始めた。

——この男は嘘を言っている。そう、己に言い聞かせる。

……でも、おかしいとは、心の奥底では思っていた。

腹が空いているのなら、食材を地面に置いた瞬間から食い付く筈だ。だが、食欲をそそるハムやソーセージの香ばしい匂いにも、この母親は何の反応を示さなかった。それは今でも。

まるで、食べる必要がなくなってしまったかのように……。

いくら弱っているからとはいえ、人間が近付けば親は子を守る為に戦う。この動物の母親はミアに牙を剥いてもおかしくはなかったのだ。

しかし、この母親は、ミアが近付いてきた時ですら目を開けなかった。

それが一体何を意味しているのか。少女は胸の奥で、絶望感が広がるのを覚えた。

男の下劣な笑い声が異様に響いた。

「残念だったな嬢ちゃん。乳が出ないんじゃない、そのガキも時期に野垂れ死ぬさ。この親のようにな」

一線の雫が流れた。どれだけ強く拳を握り締めて我慢しようとも、一度流れた涙を止める術はない。

死んでしまった。親がいなくなったのだ。もう話す事も、一緒に暮らす事も出来ない。

最愛の人が、消えてしまったのだ……。

けれど、自分が流す涙や心の痛みなど、この子供達とは比べ物にならない筈だ。

もしかすると、鳴いていたのは、ただ腹を空かしているからではなかったのかもしれない。

あの声は、眠り続ける母を呼び覚ませる為の叫びだったのかもしれないのだ。

小さい命が鳴いている。懸命に母を呼んでいる力無き叫びだった。その姿は、母に置き去りにされた自分そっくりだった。

——ここで待ってなさい——

ミアにとって、それが母との最後の会話。もう二度と、あの優しくった母には会えない。この子供達も、いずれ知る事になるのだ。

男の汚い手が、ミアに触れようとした。食料と少女を蹂躪しようと企む魔の手だった。

「……ないもん」

頭に触れる寸前で止まる。先程の震えた声とは打って変わって、少女の声は強くなって放った。

「死なないもん！」

涙が宙に飛散する。振り返った刹那、ミアの瞳は、およそ七歳の少女が持ち得ない鋭い眼光を秘めていた。

この時初めて、男は小さな動揺を見せた。一瞬ではあるものの、目の前の小さな少女に脅威を感じた筈だ。

「ミアがこの子たちの『お母さん』になるもんっ、毎日ごはん、あげるもんっ……一緒に寝てあげ、るん……だもんっ！」

怒鳴りと言うより、悲鳴に近い叫びだった。子供達の鳴き声が聞こえてくる。この子達を護るのは自分なのだと言い聞かせた。

母が必要なら自分が親になろう。腹を空かせたのなら食事を、眠くなったら寝床を与えよう。この子達が欲する全てを自分が与えれば、悲しまなくて済む筈なのだ、と。

まさか、刃向かうなどと思ってもみなかったのだろう。怯えは消えてはいないが、懸命に恐怖と立ち向かうミアに、男達は黙っている筈もなかった。

彼等に見れば何の面白味もなく、逆に子供に舐められたという屈辱感が怒りを表せていた。

「黙って聞いてりゃ——」

怒りに顔を歪ませる男に、ミアはこれまでにない恐怖と絶望感を覚えた。目の前に風が起こった。気付けば男に胸倉を掴まれていて、足は地面に付いていなかった。

鬼の顔が目前にあった。引き攣った声が口から漏れる。

「多少痛い目に遭わねえと分からねえみてえだなオイ」

恐怖のあまり、漏らしてしまう。全身が痙攣のように震えまくっている。パニックのあまり、涙が引っ込んでしまっていた。

男の拳が振り上げられる。

殴られる！——思わず目を閉じた。

——刹那、悲鳴が轟いた。それはミアではなく、男の悲痛な叫び声。

「ミアッ！」

聞こえるのは馴染みのある女性の声。いつもは凜とした美しい声色が、今は狂気と思えざる程の憤怒に満ちた叫びだった。

けれど、今まで聞いた事もない怒りを露わにしても、自分の名を呼ばれた瞬間、ミアは止めどなく涙が溢れ出していた。

涙で視界が歪んでいても尚、その視線の先にいる姿が誰なのか、もはや問うまでもない。

思わず、その姿の方に向かって喉が潰れる程に叫んだ。

「レイイイインツ！！！」

両手で強く握り締めたパイプを、渾身の如く男の頭部に振り落とす。殴られた男はそのまま気を失ってしまったが、問題はミアを掴んでいる男だ。

「その手を離せ！」

勢いを抑えず再びパイプを振り被る。だが、あろう事か、男はもう片方の手で振り被ったパイプを受け止めていた。

驚愕に色を染めている場合ではない。男は既に次の手を打ってきていた。反撃出来ないようにパイプを握り締め、遠心力と脚力を武器

に片足をレインの腹部にめり込ませた。

男の蹴りを真正面で受ければ、女の身体など容易く吹き飛ばされてしまう。事実、レインの身体はそのまま壁に強く叩き付けられてしまう。

「何してくれてんだ、テメエはよオ」

男の興味はレインに向けられる。否、殺す対象が入れ替わっただけに過ぎない。

既にミアは解放されていたが、男の足は、倒れて呻き声を上げているレインに近付いて行った。

目を疑う光景だった。あまりの残酷さに、ミアの目は釘付けになって逸らせなかった。

男は容赦なく、うつ伏せになっているレインを踏み付け、蹴るなどの暴威を繰り返した。その度に、レインの悲痛な声が耳に入ってくる。男の暴力を今のレインに防ぐ術などない。ただ理不尽に暴力の嵐を受け止めるしかない。口から血が出ている。もはや目を背けてしまいそうな程に……。

その時、レインの視線がミアに向けられた。蹴られて悲痛な声が漏れていても尚、真っ直ぐなその瞳は、何かを訴えている。

逃げて——そう言っているように思えた。いや、レインの口の動きが、そう言っていた。

逃げたい。今すぐに逃げたい。レインが自分の代わりになってくれ

ている。そのチャンスを逃していいのだろうか……。

いけない……このままじゃレインが死んでしまう！ この母親のよ
うに、動かなくなってしまう！

胸の奥に込み上げる感情を抑える事は出来なかった。気付けば、ミ
アは声を上げていた。

「レインから離れて……！」

暴力が止まる。視線は足元にいるレインではなく、ミアに向けられ
る。

「んだよ？ こいつ、お前の母親じゃねえのか？」

名前で呼ぶ事に不審に思ったのだろう。男の問いに言葉が詰まる。
レインは母親ではなく、『代わり』なのだ。

だから、彼女を『お母さん』と呼ぶ権利を、ミアは持っていない。
無論、自分を母と呼ばれる権利を、レインは持つ事は出来ない。

何故なら、二人は血の繋がりのない赤の他人なのだから。

「レインは……」

ミアの視線はレインへ。全身に激痛が走っていて、身動き一つすら
出来ない状態。けれど、悲痛な表情を浮かべながらも、レインは懸
命に口を動かした。

——逃げて。もはや声も出せない状態だ。

そう。ミアが取った行為は、彼女の犠牲を無駄にしている。

それでも、ミアは逃げないでいる。逃げないのは、正義感からではない。

ただ、自分の目の前から、大切な人が消える光景をこれ以上、二度と見たくない。それが逃げない理由だった。

「にげ……なさい……」

絞り出るような、擦れた声。

「はや、く……」

言葉を出す度、口から鮮血が流れる。

「や、やだ……」

何も出来ない自分が悔しくて、怖くて、涙が溢れてくる。

「言う、事を……聞き、なさいっ……」

二人の会話に、男の笑い声が割り込んだ。

「そりや言う事なんか聞けねえわなっ、こいつはお前の母親じゃねえんだからよ！」

侮辱を含めた男の下劣な笑い声に、ミアの中で何かは弾けた。それは、今まで無意識に押し殺してきた感情の爆発だった。

「違うもん！」

その言葉は、男はおろか、レインでさえ目を点にさせた。

ミアは涙と鼻水でグシャグシャになった顔で言い放つ。

「レインはミアの『お母さん』だもん！ 毎日ごはん作ってくれし、一緒に寝てくれるもん！」

小さな抵抗が何を生むというのか。少女のありったけの声で叫ぶ言葉など、この男の心に響く訳がない。

レインの中で矛盾が回る。どうして逃げなかった？ 自分が暴行を受けていた時に不意を付けて逃げれば、助かったかもしれないのだ。

……なのに、怯える身体に鞭を入れてまで、どうして立ち向かう？
どうしてこの少女は、喉が張り裂けんばかりに声を上げて自分の想いを曝け出している？

——どうしてこの子は、自分を『母』と呼んでいる……？

「優しくしてれたもん！ いっぱいお話してくれたもん！ いっぱい遊んでくれたもん！」

「……」

涙を流すのはミアだけではなかった。自然と溢れ出す雫は、情けなくレインの顔を汚す。

ミアを施設に引き取ってから二週間あまり。レインの愛情は、確かにちゃんとミアに届いていたのだと、この瞬間を持ってようやく、ミアの気持ちを知る事が出来た瞬間だった。

「レインはミアのお母さんだよ！ 優しい、ミアのお母さんだもんっ！」

ミアの一言一言がレインの心を揺さぶる。涙はとめどなく流れ続ける。本当の我が子のように、愛する感情が胸一杯に膨れ上がった。

けれど、感動するのはまだ早い。悪魔は確実にミアの方に向かっていた。

「安い家族愛を見せてくれて有難うよ。感動し過ぎてゲロ吐きそうだぜ」

「や、止めて！ その子には手を出さないで！」

男の魔の手が、ミアの頭を鷲掴みした。

力を振り絞って身体を引き摺る。全身に激痛が走ろうが骨が軋もうがどうでもいい。あの悪魔から、大事な子を護れさえすれば……！

だが、レインがミアの元に辿り着く前に、男の拳が構えられる。

「こういう奴等を見ると、虫唾が走るんだよ。テメエのようなガキはこいつの前で殺してやる」

「やめ——」

目に映る光景——否、全てを拒絶するように、レインは涙を散らせて絶叫——

——する刹那、視界に舞い降りたその『異質』に、出ていた言葉が掻き消される。

「——ほう、奇遇だな。私もお前のようなクズを見ると虫唾が走る」

その凜とした声は、まさに神の宣告——罪人に裁き下すよう——。

「だが、殺す、という言葉は、子供の前では些か常識外れではないか？」

ミアも、レインも、誰もが意表を突かれた。

ミアの頭を掴む男の腕に、本来ある筈のないものがあつた。

突如と三人の前に現れたのは、紅蓮の色を宿した蠱惑の女性。

刹那、男が狼狽を見せた。女の二周り以上もある男の腕があり得ない方向に曲がっているのだ。

悲鳴が轟く。女はミアを抱え、そのまま何事もなかったかのように男の横を通り過ぎて行く。男は膝を折り、曲がった自分の腕を握り締め、激痛と怒りを宿した表情を女に向ける。

「殺す！ 全員殺してやるっ！」

鬼相を宿し、狂気に満ちた雄叫びは、男の理性が完全に吹き飛んだ事を意味していた。

戦慄が背筋を走った。男はレインが武器にしていたパイプを握り締めている。狙うのは女の後頭部。だが、レインは危ないと叫びたくても、これ以上の声が出せない。

雄叫びを上げながらパイプを振り上げる男を見向きもせず、女は静かに囁いた。

「こいつの始末、君に任せていいな？」

後頭部を殴られる鈍い音が響くと思っていた。けれど、予想を反して、金属がぶつかり合う音が響いていた。

目を疑う。男のパイプを、別の男が、何の変哲もなさそうな、それでいて長年放置され続けた結果、所々で劣化が激しい、木造の板で受け止めていたのだ。

「——二人を頼む」

俺はそう言って、男と距離を取る為にパイプを弾いた。男は反動で後ろに後退を余儀なくされる。

三人の方に目を向けた。ミアの身体に外傷は見当たらないが、レインの方は重傷だ。身体の傷だけではない事は一目見れば十分に理解出来た。早く治療しなくては、取り返しのつかない事になる可能性もある。

エレンの肩を借りてレインもなんとか立ち上がれそうだが、中央区を抜けるには結構な時間が掛かる筈だ。

賊がこの付近に潜んでいる事が判明した以上、あまり長い時間を彼女達だけにしておけない。

男に目を向ける。瞬間、抑えきれない程の憎悪が胸の奥底から爆発した。レインに傷を負わせたこの男が、こいつの存在が赦せない――。

目の前の男が俺に恐怖し始めていた。だからどうしたというのだ。貴様は、今まで幾度の恐怖を人に植え続けてきた？ そのツケを、今日払う事になるのだ。

「貴様……覚悟は出来てるんだろうな――」

男は恐怖で正常な思考を出来ていなかった。叫びながら強引にパイプを振り上げる。男の腕力であれば、大の大人でも一溜まりもないだろう。

先手は相手が先だったが、構わない。

煮え滾った感情を、俺は迷わず爆発させてやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1965z/>

オルベリーヌの方舟

2011年12月19日23時02分発行